162.9
K139

始

1629
ル39

希臘羅馬神話

木村鷹太郎著

大正
帝国
図書館

コ725

序文

『世界の善美は亞細亞に起原し、亞細亞に保藏せり』とは我々の題目とする所である。

希臘神話——世界の諸の神話の中で、最も優美で、最も自然で、最も自由で、最も流暢で、最も曲線美に富み、而も餘りに議論せないで、義理は自然に備はつて居るものは希臘神話である。

實は亞細亞神話——我々が創めた方法で嚴正な新研究を加へて見ると、所謂希臘神話なるものは、決して歐羅巴の小さい希臘の國のものでなく、實は太古の亞細亞（及び阿弗利加等）に於ける、大希臘民族の神話で、此大希臘民族の祖先は太古西の方に居た所の我々日本民族であつた。それだから希臘神話と日本神話（及び日本歴史）とを比較すると、全然同一たることを發見するのである。

本書の目的と諸神話比較――本書は『一般の讀物』として希臘神話を神話その物として說き、又面白い讀物とするにあるが、又是れに他の種々の神話――特に日本神話の比較を加へることにした。是れは東西の知識を與へると共に、趣味の擴大を計るに於て、最も當然の事で、本書は此點に於て、世界獨歩を誇つても善いと信ずる。けれども比較神話に於て東西諸神話の一致し、同一であることに付いては、人間の知識欲は、尙は進んで其の理由を求めて止むものでない。そして其解決は之れを神話地理の研究に待たねばならぬことゝなる。だから本書は神話の各章の終りに、可なり精密な地理を說くことにした。

神話地理――從來の西洋一般の希臘神話の著者等は、右言うた如く、希臘神話は亞細亞、阿弗利加のものである事を知つて居らぬ。其れ故に其地理は、矢張り歐羅巴の小さい希臘の國に求めて、牽强附會の說明をして居る。實に憫然なものと謂はねばならぬ。が其れは當然の事で、希臘神話は今の希臘の國土にあつたものでないからである。

要するに西洋人等の希臘神話の種々の說明や、專ら地理に關することは、本書に由つて根本的に轉覆抹殺されて仕舞ひ、又た從つて希臘古代史も轉覆されるのである。此點に於ても本書は斯學に於けるエポック・メーキングたることを廣言することを敢て憚らぬ。

希臘神話と日本民族史――神話の中には宇宙の眞理や、自然の說明や、人生の哲學などが、比喩を以つて寓言を以つて、世間離れのした面白い筋の話を以つて、又は神秘の言葉を以つて含まつて居て、古來多くの神話學者が種々其等の說明を試みた者もある。けれども其等の中、最も興味があり、且有益な事は、神話中に含んで居る歷史的の分子で、特に比較研究上、日本民族史が希臘神話に非常に密切な關係を有つて居り――、日本人は希臘神話の研究に由つて、始めて日本民族史の眞相を知り得ることである（希臘人も亦日本神話及び日本歷

史を研究したら、同一の感があるであらう。さにして、希臘神話を知らぬ者は、眞正の日本民族史を知らぬものと謂うて間違はない。日本歴史も、世界歴史も、此に本書の行ふが如き新研究法に由つて、改造されねばならぬことを一言して置く。

日本在來の希臘神話書――で、最も始めに出たものは今より殆ど十八九年か、二十年前に赤司繁太郎氏が書いた、小さなものであらう。書物の名は覺えて居らぬが、素より不完全のものと思はれる。明治四十二年に杉谷代水氏の『希臘神話』と題してボールドキンの書を譯したものが富山房から出版された。文章は大に技巧を盡くしたものだが、原書が不完全なものだから、希臘神話を知るには甚だ不完全な書物たるに過ぎぬ。殊に神名人名等の發音が英語流でやつてあるから可笑しな感があり、可愛そうな氣がする。大正元年前田越嶺氏の『希臘物語』なるものが博文館から出版されたが、取り立てゝ言ふべき程のものでもな

く、挿畫などは拙惡の畫と、不美の版で、希臘趣味は味ふことは到底出來ぬ。大正二年野上八重子女史の『傳説の時代』と題するバルフインチの書物が譯されて尙文堂から出版された。前諸書に比較すれば最も精密で、紙數も多く、挿畫なども美しいものも澤山あるが、バルフインチの原書は神話の系統、順序等錯雜して居て、其原書が惡るい所からして、譯書も從つて其種のものである。其後誰であつたか、『希臘羅馬神話』と題する小さな書物を何所からか出した人があつたが、吾輩は見ずに濟んだ。

著手より約七年――本書は先きに出た同種類の書物より後に出て、何等誇るのでは無いが、神話の順序、系統などに聊か意を用ひたことは一言して置く。又た神話比較を試み、神話地理を研究し、希臘神話は實は東洋神話たることを明かにした事などは世界の學界に貢獻した點に於て、決して小いものとは思はぬ。

本書は素より完全なりとは小生自身信せぬけれども、著手より出版に至るまで約七年。其の間訂正し、研究し、心血を注いだもので、杜選の作で無いことは讀者諸子の諒とせられんことを希望する。

固有名詞發音——は或るべく希臘流の發音を以つてしたが、其日本に親しく行はれて居るもの、又た日本に固有せる希臘的名稱は、純希臘的にせなんだものもある。又た多少略發音で表はしたものもある。けれども、オルフエウスをオルフォイスとし、ヨウロッパをオイロッパなどと發音する獨逸流の誤つた發音は一切採用せぬ。又たアイギウスをエジュースとしたり、テーセウス又たテシオスをシーシュースとしたり、ピッテウスをピットシュースとするやうな可笑しな英語流の發音も勿論採用せぬ。

終りに讀者諸子に願ふことは——

幸に本書を熟讀して下さつた諸君は神話比較、及び神話地理に關して、必ず一種の感想が起ることゝ信ずる。願くば一封の書を惜しむことなく、其感想を著者に聽かせて下さらんことを。又た神話比較上著者の知らぬ事で、諸君の中、御心付の方々は、著者に御教へを願ひたい。其正當と思ふものは、本書版を重ねる時本書にか、又は小生發行の「日本民族研究叢書」にか、何れにか其れを掲載して、諸君の好意を記念することに致したい。

大正九年六月一日

東京市外。戸塚町諏訪一七九
木村鷹太郎

欠

目次

黄金時代……二七
チタン神族とゼウス神族との戰爭……二八
チフオーンの謀叛……三一
ウラノス餘類の謀叛……三二
白銀時代……三三
人類の起原……三四
プロメーテウスとエピメーテウス……三五
プロメーテウスの義俠……三八
美女パンドーラの創造……四〇
プロメーテウスの苦しみ……四二
赤銅時代と黑鐵時代……四五
ゼウカリオーンの洪水……四五
第二章　世界始原神話の比較研究と其地理……四八
(一)神話の比較……四八
世界始原神話……四八
天地開闢神話……四八

欠

ウラノスとガヤ……四九
目一箇の神……四九
チタン神族……四九
ゼウス神族とチタン神族との戰爭……五〇
有巢氏と蟻人氏……五一
クロヌシの黄金時代に就て……五二
蛇身のケクロップスと庖犧氏……五三
プロメーテウスと愚樂神……五三
洪水神話の比較研究……五五
(二)地理研究……五五
ウラノスとガヤとの地……五六
チタン十二神の地……五七
特にクロヌシの國……五八
キクローブス……五八
百工神族……五九
オリムポスの神山とオトリス山……六〇
チタン神族は出雲族、サタン族……

プロメーテウスとエピメーテウスとの地……六〇
金、銀、銅、鐵時代の地……六一
洪水の地……六二
石が人に爲つた地……六三

第三章　ゼウスとヘーラ女神……六四

オリムピヤ……六四
オリムピヤの十二神……六五
ゼウスの成育……六八
宇宙の三分統治……六九
ゼウスの神性……七〇
パウキスとフィレイモン……七三
ゼウスの戀愛關係……七六
イヨ媛……七七
ヨウロツパ媛……八〇
アイギナ媛……八三
アンチオパ媛……八四

羅馬のユピテル……八六
美術上のゼウス……八七
ヘーラ女神……八九
ヘーラ女神の賚物……九〇
羅馬のユノ女神（ジューノ）……九一
希臘神話の女神誤解……九二
美術上のヘーラ女神……九二
ゼウスとヘーラ女神の地理……九四

第四章　ゼウスとヘーラ女神に從屬する神々……九四

ムネモスネの女神とミューズの神々……九四
テミス女神とホーライ（蓬萊）女神……九六
ヨウルノメ女神と優美女神……九七
運命の三女神……九八
ネメシス女神……一〇二
ヘーベ女神……一〇二
ガニメーデース……一〇三

ミューズと日本の「宮中八神」及び其地理……一〇五
ミューズ地理……一〇八
テミス、ヨウルノメ、運命女神等の地理……一〇九
イリス女神の地理……一一三
ヘーベとガニメーデース地理……一一四
ネメシス女神の地理……一一四

第五章　アテイナ女神……一一五

アテイナ女神……一一五
女神の誕生……一一五
水神ポセイドーンとの競爭……一一七
智慧、戰爭、及び國家守護の神……一一八
平和の技術の神……一二〇
織女アラクネとの競技……一二一
アテイナ・ニケ……一二五
天照大御神……一二六
アマゾンとの關係……一二八

「アテイナ」の意義……一三〇
羅馬のミネルバ女神……一三〇
美術上のアテイナ……一三一
アテイナ神話の地理……一三一

第六章　日光の神アポローン……一三二

アポローン……一三二
レートー姫のさすらひ……一三三
アポローンの生誕……一三三
世界の中央パルナッソス山……一三四
大蛇ピトン退治と、デルフォイの神託……一三六
桂の花のダフネ鍵……一三七
マルシャスの皮剥ぎ……一四〇
パンとアポローンとの音楽競技、及びミダス……一四五
コローニスと烏……一四六
神譬アスクラピオス……一四七
アヴメートスの家……一四九
アヴメートスと妻アルケースチス……一五四

巫女カスサンドラ……一五六
向日葵の花のクルチエ……一五九
ニナヘの神罰……一六〇
ヒヤシンスの花……一六〇
哀々リノス……一六五
ファイトーンの日の車……一六八
風原の「東君」……一七〇
オルフェウスとヨルヂケー……一七七
美術上のアポローン……一七八
アポローンと日本武尊……一八二
アポローンの意義……一八三
アポローンの神話地理……一八四

第七章　アルテミス女神（ヂアナ）……一八五

アルテミス……一九〇
アクタイオンの運命……一九〇

エンデミオーン……一九三
ヒカテ女神……一九四
「アルテミス」と「ヤアナ」の意味……一九五
美術に於けるアルテミス……一九六
アルテミス神話地理……一九六
第八章　水神ポセイドーン（ネプツーヌス）……一九八
前期の海神系統……一九八
海の新時代……一九九
ポセイドーンの神話……一九九
ツロイ王女ヘシオーネ……二〇二
ポセイドーンの競爭……二〇三
デーメーテール女神との戀愛關係……二〇四
テオファネーとの戀愛關係……二〇五
正妻アムフィトリテ……二〇六
イダとマルペッサ女……二〇七
香住吉の神……二〇八

美術上のポセイドーン……二〇九
ポセイドーンの神話地理……二一〇
第九章　次級の水の神々……二一一
トリトーン……二一一
ポントス（海）とガヤ（陸）との子、フォルキス……二一一
ケイトス、ヨウリビヤ、タウマス、ネーレウス……二一二
ハルピー……二一三
セイレーン……二一三
グライアイ……二一三
ゴルゴン……二一三
スキラ……二一三
カリブヂス……二一四
キクロープス……二一四
ガラチヤに對するキクロープスの片戀……二一四
グラウコスとスキラ……二一六
ニソスとスキラ……二一八

變身者プロー……二二〇
リウコテヤ……二二一
河の神々……二二二
泉の神々……二二三
ヌマとカメナエ……二二四
仙女アレズサのさすらひ……二二五
次級水神地理……二二七

第十章　使神ヘルメース（マーキュリー）……二二九

生誕及び盗み……二二九
カヅケの棒……二三〇
羽根ある靴と帽子……二三一
使者、商業、交通の神……二三一
博奕と盗賊の神……二三二
言葉の神……二三五
國常立ノ神、月讀ノ神……二三六
蛇とヘルメース……二三六

盗跖と酒呑童子……二三七
美術上のヘルメース……二三八
ヘルメースの神話地理……二三九

第十一章　竈の女神ヘスチヤ（ヱスタ）……二四二

竈の神……二四二
ヱスタの乙女……二四三
ヱスタルの特權……二四四
ヱスタの祭禮……二四六
ヘスチヤ地理……二四六

第十二章　鍛冶の神ヘーファイストス（ヴルカン）……二四六

ヘーファイストスの孝行……二四六
天上より蹴落さる……二四六
天上に召さる……二四八
鍛冶の神の戀……二五〇
崇拜者……二五一

美術上……二五〇
神話地理……二五一

第十三章　美と戀とのアフロヂテ女神（ヴーナス）……二五二

生誕と昇天……二五二
鍛冶の神との强制結婚……二五六
アレースとの不義……二五六
エロースの弓矢……二五七
花のアドーニス……二五九
アモールとプシケ姫……二六一
ヘーロとレアンデル……二七一
ピラムスとチスベ……二七六
ピグマリオーンの人形……二七八
ペレニケーの黑髮……二八〇
アタランタの競爭……二八一
日本傳說の比較……二八二
美術上のアフロヂテ……二八四

アフロヂテ神話地理……二八五

第十四章　軍神アレース（マース）……二八八

アレースの神話……二八八
アテイナ女神との競爭……二八九
巨人オーツスの捕虜となる……二九一
アレースの戀愛關係……二九二
ロムルスとレームス……二九三
羅馬初代の王……二九三
アレース神話地理……二九四

第十五章　地獄の神プルトーン（ハイデース）……二九六

プルトーン……二九六
地獄の門……二九七
地獄の河々……二九七
地獄の裁判官……二九九
怨怒の三女神……二九九

運命女神……三〇〇
無間地獄……三〇〇
ダナイ族……三〇〇
タンタロス……三〇一
シシホス……三〇三
サルモネウス……三〇三
チチウス……三〇四
イクヰオーン……三〇四
極樂……三〇六

第十六章　土地の神々……三〇七

先代の地神……三〇七
地神ガヤ……三〇七
レヤ・クベレ……三〇八
少年アッチス……三〇九
ゴルヂアスとミダス……三一〇
高天原神話との比較……三一二

第十七章　大母デーメーテール（ケレース）……三一五

デーメーテール……三一五
ペルセフォネの誘拐……三一六
ツリプトレモス……三二〇
アレズサとアルフェウス……三二二
黄泉戸食……三二五
四季の由來……三二五
穀稻祭（ウルシネ＝エルシネ）……三二六
美術上のデーメーテール……三二六
デーメーテール比較神話と地理……三二九

第十八竢　野山、谷川、草木の精……三三二

サツリ……三三二
シレニ……三三二
パン……三三三
ニムフ……三三四

仙女エコー(反響)とナルキスソス……三三五
戀の循環拒絶……三三七
ロイコスの盲目……三三八
エリシクトーンと餓鬼……三三九
グリオペーの蓬……三四二
マイナッド……三四二
柳のおりうとロイコス神話……三四三
神話地理……三四五

第十九章　酒の神ヂオニソス(バッカス)……二四六

酒神ヂオニソス……三四六
ヂオニソスの生誕……三四七
酒神の教育……三四九
酒神の世界傳道……三五一
酒神の凱旋……三五三
アケテースの話……三五四
アリアヅネとの結婚……三五八

漂泊の罰……三六〇
黄金の詛……三六一
榮えの神……三六三
ゆるしの神……三六四
和しの神……三六五
甦生の神……三六六
獅子とヂオニソス……三六六
ヂオニソスと黄帝……三六七
儀・迹々・百鬘姫……三六七
耶蘇教とヂオニソス教……三六八
葡萄教と佛陀教……三七〇
正哉・吾勝・勝速日・天忍穂耳命……三七一
神々の統一……三七二
美術上のヂオニソス……三七二
ヂオニソス神話地理……三七二

第二十章　天象神話……三七五

東雲女神とケファロス……三七五
ケウコスと妻ハルクオネ……三七七
睡眠洞……三七九
ハルクオネの島……三八〇
東雲女神と白頭翁チトーノス……三八一
メムノン……三八六
虹の女神イリス……三八七
風の神話……三八七
星の神話……三八八
曉の明星と宵の明星……三八九
オーアリオーンの幸福と不運……三八九
天象神話地理……三九三

第二十一章　羅馬特殊の神々……三九八

サツルヌス……三九八
ヤヌシ……三九九
ユツルナ……四〇一

フアウヌス……四〇二
コンスス、フェローニヤ、フロラ、ビエツムヌス……四〇三
ポモナ……四〇四
河と泉の神々……四〇五
抽象無形の神々……四〇六

第二部　英雄神話……四〇九

第二十二章　ペルセウス……四一一

ダナウス家……四一一
ダナエ嫒の箱船……四一二
箱船の行衛……四一三
セリフオス島……四一三
ペルセウスの成長……四一三
夢枕のアテイナ女神……四一四
ポリデクテースの宴会……四一五
ゴルゴン……四一七

首途……四一八
グライアイの老女……四一九
夕日媛……四二〇
メヅサ……四二一
歸途……四二二
アンドロメーダ媛……四二三
セリフォスに歸る……四二四
本國アルゴスに歸へる……四二五
太古の世界交通……四二六
須佐之男命比較……四二九

第二十三章　ヘーラクレース……四三〇

幼時のヘーラクレース……四三〇
ヘーラクレースの選擇……四三一
發狂……四三二
十二勞役(第一)ネメヤの獅子退治……四三三
(第二)九頭龍退治……四三四

(第三)、(第四)、(第五)、(第六)、(第七)、(第八)……四三五
(第九)アマゾン女王の帶……四三六
(第十)ゲールオネースの赤牛……四三六
(第十一)夕日媛の林檎……四三八
(第十二)ケルベロスの犬……四四一
ジフラルタルの打ち開き……四四一
オリムピヤの競技……四四二
オーカリヤ王ヨウルトス……四四二
女王オムフアレー……四四三
其後の事業……四四四
オータ山に於けるヘーラクレース……四四六
ヘーラクレースとデヤネイラ媛……四四七
ネスソスの毒血……四四八
ヘーラクレースの死……四五一
小栗判官との比較……四五三
ヘーラクレース地理……四五四

第二十四章　チバ家のカヅモス……四六一
夕顔の行衛……四六一
神牛の敎……四六二
カヅモス蛇を殺す……四六三
蛇の齒を蒔く……四六三
カヅモスとハルモニヤとの結婚……四六五
カヅモス家の不運……四六五
パッカス敎輸入……四六六
希臘文字の輸入……四六六
坂上苅田麿の祖先……四六八
源氏物語の「夕顔」との關係……四七二
カヅモス地理……四七三
希臘文字と日本片假名……四七五
第二十五章　オイヂプス……四七七
オイヂプス……四七七

神託……四七八
スフインクスの謎……四七八
母と結婚……四七九
兩眼をゑぐる……四八〇
オイヂプスの死……四八一
二子の爭ひ、七勇士のチバ攻め……四八二
アンチゴネ……四八三
「エピゴニ」……四八四
惡七兵衛景淸との比較……四八四
オイヂプス地理……四八八
第二十六章　ミノースと名匠ダイダロス……四九〇
ミノース王……四九〇
ミノ牛の迷宮……四九一
ダイダロスの飛行機……四九一
飛驒の工匠、墨子、神話地理……四九三

第二十七章　カリドーンの猪狩……四九五

アイトロス家……四九五
メレアゲル薪の生命……四九五
オーネウス……四九六
カリドーンの猪狩……四九六
アタランタ……四九七
薪燃え盡くす……四九八
カリドーン地理……四九九

第二十八章　ヤソンのアルゴ丸の遠征（金羊——鹿取遠征）……五〇一

アタマスと金羊……五〇一
ヤソン……五〇二
アルゴ丸の建造……五〇三
鹿島立ち、其航路……五〇五
コルキス王アヤテース……五一〇
メデヤ媛の妖術……五一三

ペーリアスに復讐……五一五
アルゴ丸星座の日本古典記事……五一七
ヤソン神話の地理……五一八
歸航路—ニカラガ運河の着眼……五二三
他の地理的材料……五二七

第二十九章　テシオス……五三四

テシオスの祖先……五三四
父アイギウス……五三五
テシオスの武者修業……五三六
アテイナイに於けるメデヤ……五三八
七人の少年少女……五三八
アリアヅネ見棄てらる……五四〇
テシオスとアマゾン女王……五四一
ピリトーオスとの交り……五四二
テシオスの地獄行き……五四三
後妻ファードラの不義……五四四

テシオスの死……五四四
テシオス(天鹿)の名……五四五
テシオス地理……五四六

第三十章　ベレロフォーン……五四八

ベレロフォーン……五四八
怪獣キマイラ……五四八
天馬ペガソス……五四九
ベレロフォーンの末路……五五一
ベレロフォーンと征東大將軍摩原忠文……五五一
朝夷三郎義秀とベレロフォーン……五五三
ベレロフォーンの暦法地理……五五四

第三十一章　ツロイ戰爭……五六二

女神テチスの結婚……五六二
「一番美しい人へ」……五六三
パリスと仙女オイノオネ……五六四

パリスの審判……五六四
パリス、ツロイに歸る……五六五
パリス希臘に渡航す……五六六
ヘレンの誘拐……五六七
戰爭の準備……五六七
ユリセースの參戰……五六八
ツロイの王家……五六九
希臘總大將アガメムノーン……五七〇
アキレウスの幼時……五七一
アキレウスの發見……五七二
イフィゲニヤ、人身御供……五七三
プローテシラオスとラオダミヤ……五七四
「イリアッド」……五七五
クリセイス嬢とブリセイス嬢……五七六
アキレウスの參戰……五七七
アガメムノーンの夢……五七八
陣々の騒擾……五七八

戰鬪開始……五七八
希臘の軍議……五七九
次の戰爭……五七九
ヘーラ女神の策略……五八〇
アキレウスとパトロクロス……五八一
アキレウスの甲冑……五八二
サルペードーンの討死……五八三
パトロクロスの討死……五八三
アキレウスとアガメムノーンの仲直り……五八四
ヘクトールの討死……五八五
プリアム王、アキレウスの陣に至る……五八八
「嗚呼忠臣ヘクトールの墓」……五八九
女國王ペンテシレヤ……五八九
メムノーン……五九一
パリスの死……五九二

第三十二章　イナイ王の冒險（羅馬建國神話）……六四九

「イネイド」……六四九
ツロイ落城……六四九
イナイ一家都落ち……六五〇
妻クレウサの幽靈……六五一
トラケーの事件……六五一
デーロス及びクレタ……六五二
ハルピーの怪鳥……六五二
アケメニデースを救ふ……六五三
カルタゴに着す……六五四
イナイ王とザドウ姫……六五四
ザドウ姫の死……六五六
アンキセースの幽靈……六五七
パリヌルスの死……六五七
クメの巫女……六五八
地獄行き……六五九
ザドウ姫の妻……六六〇
極樂にて父に會ふ……六六一

クメの巫女の尊敬……六六二
ラチウムに到着す……六六三
ラチン人の戰爭……六六三
カミラの女軍……六六四
イナイ援をエウアンデルに求む……六六五
ニススとヨリヤルス……六六六
イナイの到着……六六六
イナイの武勇……六六八
ツルヌスの死……六六九
イナイの後裔……六六九
「神武天皇紀」と「イナイ傳」との一致……六七〇
背向けるヂドウ姫と「住吉物語」……六七四
女將軍カミラと神武天皇記の「おみら」……六七七
カミラの父と「三國志」の呂夫……六七八
ラチン人と支那「三國志」時代の「羅甸」……六七九
ニススとヨリヤルスと左藤綱信と忠信……六八〇
イナイ地理……六八三

北人神話及び其新研究

第一章　エッダの天地開闢記……六八九
北部亞細亞の堂々たる神話……六八九
巨人族、牝牛、神々の發生……六九二
全世界を覆ふ桑皮の樹……六九五
世界及び人類の創造……六九九
「エッダ」と「書經」堯典との關係……七〇二
第二章　神々及び其アシガルドの國……七〇五
神々……七〇六
神々の國……七〇七
第三章　トールのイオーツンハイム旅行……七一〇

附錄一

トールの大旅行……七一〇
トール出立印度河口……七一一
巨人の手袋＝フェルガナ……七一三
巨人に三大痛撃＝キルギス廣原……七一五
「義經記」の巨人國記事……七一八
「葱狩劍の本地」の巨人記事……七一九
ウトガルド・ロキの都トボルスク……七二一
食事競爭と眼鬼廣原……七二三
競走＝トムスクのバラバ廣原……七二四
飲酒競爭＝エニセイスク……七二五
大猫＝イルクートスク……七二六
此大蛇は黑龍江……七二七
老女とトールとの角力＝ヤクートスク……七二八

第四章　ロキの一族……七三二

ロキの三子……七三二
フェンリスの狼の所分……七三二

ロキなる者……七三三
蒙ㄱ＝フェンリスの狼……七三四
腦嚙み切られし軍神……七三六
ミツドガルドの大蛇……七三七
地獄の女神ヘラ……七三七
アンゲル・ボディ＝樺太……七三七

第五章　バルヅール神話……七四〇

天地間萬物不害の誓ひ……七四〇
ロキの惡事……七四一
宿木……七四一
ヘルモツドの使命……七四二
鬼婆タウクト……七四四
バルヅールの火葬……七四五
ロキの苦しき罰……七四五
バルヅール、天稚彦、アモールの比較……七四六
宿木と「日本振袖始」の三熊の大人……七四七

宿木の地理……七四九
天國より地獄への地理……七五〇
火葬の船……七五三
ロキの隱れ場所……七五四
日本津輕とパルヅール關係……七五五
第六章　ヘラ女神のニッフルハイム……七五七
ヘラ女神……七五七
ニッフルハイム……七五八
女神の九領土……七六〇
女神の宮中……七六二

附錄　二

日本戲曲の北人神話……七六七
緒言……七六七

奥州安達原の戲曲……七七一
地理大觀……七七三
桂中納言配流地——樺太……七七五
外の濱——バイカル湖畔イルクートスク……七七八
安倍宗任の捕縛——フェンリスの狼……七八一
『我國の梅の花』——沿海州プリモールスカヤ……七八五
儀杖直方邸——アムール州及びマリチメ・プロヴィンス……七八六
直方の二女敷妙——Skythae……肅愼……七八九
袖萩祭文——ヤクートスク州オメコンスキ……七九〇
緬甸、印度よりカスミル經由、タシケンドまで——蔥山王遊征路……七九四
白川の關——シルダリヤ上流タシケンド……七九八
アンポンタン賣とボッカラ（バッカの地）……八〇〇
生駒之助夫婦とイスセードン・セリカ——絹商道路……八〇一

安達原一ッ家――蒙古ガラタ山――(其一)東方の入口……八〇二
安達原一ッ家――(其二)西の入口……八〇五
環の宮の玉座――オノン河上流……八〇七
小松柵戰爭――勘察加……八一二

附錄 三

プラトーンの神話……八一四
一 プロメーテウスとエピメーテウス……八一四
二 ヘーラクレースの選擇……八一五
三 空蟬神話……八一六
四 愛の神の讃美(プラートンの宴會)……八一八
アリストファネース……八一九

(仁德天皇紀の飛驒の宿儺)……八二〇
人間身體の梨割り……八二〇
半々相求む……八二一
是れ愛情の起原……八二二
男性同志の愛・女性同志の愛……八二三
又々半裁されん……八二四
ソークラテース……八二四
愛の父母……八二五
「愛」は不死の原理……八二六

五 エルの地獄、極樂實驗記……八二八

審判……八二八
草場の會合……八二九
賞罰十倍……八三〇
新生の選擇……八三一

六 アトランチス島物語……八三三

プラトーンに多謝……八三三
アトランチス島……八三三
水神ポセイドーンの領地……八三四
宮城……八三四
海神五對の子……八三五
其富有……八三六
土木工事……八三七
ポセイドーンの神殿……八三八
其他の設備……八三八
都市、村落、制度……八三九
有德偉大の國家……八三九
暴横墮落……八四〇
全敗……八四〇
アトランチス島何處……八四一
大西洋に非ず……八四二
大平洋馬來方面……八四三
アトランチス島はスマトラなり……八四三

梁竭羅龍王の地は爪哇のジャカタラ……八四五
海神の宮城と「菅原」の梅、松、櫻と、春藤玄蕃……八四六
海神十王子の土地……八五〇
西極のアトラス國と、東極のアトラス島……八五二

希臘羅馬神話目次 終

希臘羅馬神話

木村鷹太郎著

序論——希臘羅馬神話及び神話學——

神話——とは希臘語Mythos又はMythologyを譯した言葉で、實は「話し」「言葉」「昔話」等を意味し、必ずしも神々に關する事ばかりでは無く、要するに昔話又は古事記と言へば善いのである。

世界の神話は澤山あつて、希臘羅馬神話を始め、印度神話、北人神話、猶太神話日本神話等其他種々のものがあつて、皆互に關聯したもの、同じもの、變形したものであるが、今此處には希臘羅馬に傳はつたものを研究するのである。

希臘神話――は世界の數多い神話中最も面白く、最も美しく出來て居るもので、プラトーンやヘーゲルの言うた如く「希臘民族の若やかな」永久に若やかな氣風が凡てに貫徹して居て、世界の文學美術に、又人間の品性陶冶に至大の感化力を有し、かの耶蘇教の如きすら其感化力を希臘神話から借りて居る。されば高尚優美の文學美術に希臘神話の影響や感化を受けぬものは一つも無く、實に希臘羅馬神話は尚美教育の大源泉と謂うべきである。又希臘羅馬神話と云ふけれども、羅馬は希臘の後繼者と云ふべく、只僅かの取り除けをする以外、神話は希臘神話であるから、吾等は兩者を一つに見て希臘神話と云うて可い程である。

神話なるものは一見夢のやうな、又人生に切實なものでないやうな、一種娯樂的慰安的のものゝやうに思はれるが、焉ぞ知らん、天地人生の奥底に觸れた眞理が潜んで居て、而も後世の小說類の冗長煩瑣な事がない詩歌哲學の價あることを。

又一歩進んで、世界太古の信仰、宗教、社會風俗等の研究には、最も必要のものである。希臘羅馬神話は、或は世界神話中の最も古いものとは言へぬかも知れぬが、

又最も古いものをも傳へて居て、年代の上下に通じて、世界神話研究の關門たり、又鍵を成して居る。其れ故に世界の諸神話や、太古史を研究する者には、希臘神話の研究は最も必要のものと云はねばならぬ。

神話の解釋――希臘神話は素より面白く美しい形に出來て居て、只其れを其まゝで知るのも興味あり愉快なものであるが、其れを知つた後は、其不思議な話に就て合理的の說明を求めるやうになるのは人心の自然である。今此書物は、神話を話し其まゝに傳へるを主意とするもので解釋を試みようとするものではないが、時々簡單に其說明をすることもある。神話の解釋方面或は種類には種々のものがあつて、

(一)天地自然現象――卽ち天地、日月、山川、草木、動物、植物、風雨等に人格を與へて神話としたもの――

(二)人事現象の徵象的說明的――の神話もある。

(三)言語の意味――から出來た神話もある。

(四)天文、曆法、季節等――を人化したものもある。

（五）歴史的神話――もあつて、太古の人間的事業が、除り遠遠になつて、國家、民族及び其等の事變等が一個の神或は人間となり、其間の詳細の事件が傳を失つて、其れを充たし、其れを繋ぐに神秘の記事を以つてする筆の事がある。此解釋法に似寄つたものは西暦紀元前四世紀の Euhemerus なる神話學者の專ら用ゐた所で、彼れの言ふ所に據ると神話上の神々は古代の偉大な英雄、人物が、死後尊崇されたものであると云ふのである。勿論其れも有らうが、寧ろ個人の名は遺らないで、其國家民族、事件、運動が遼遠の年代中に個人の名と思はれるやうになつたと解する方が正當のやうである。恰も無數の星群が、遠くから見れば一つの星と見え、或は銀河と思はれるやうな關係と考へられる。此點から云ふと、此種の神話は一種の歴史と云ふべく、歴史家たる者は、決して神話を知らないでは濟まぬ。且つ後代の歴史中には種々古代の神話が關係を持つて出現するものであるから、神話の知識は非常に重大なものである。殊に埃及神話や、希臘神話中の人物が日本歴史の古典には明瞭に天皇となり、皇太子となり、英雄として記載してあるなどを考へると、此種の解釋法

は重要のものと云はねばならぬ。

（六）地理神話――神話學上尙ほ重要な地理神話なるものがあることを忘れてはならぬ。地理神話に就ては從來の神話學者が殆んど言うて居らぬやうであるが、實は神話に於ては重大な成分となつて居ることは、余の特に注意した所である。其れは國家、都市、山川、河海が神として表はされて居ることで、大きな國を大きな神とし、其屬領を從者とし、都市・山川を又種々の神とし、大都市を父とし、小都市を子とし、或は娘とし、川の上流を兄とし、下流を弟とし、其れに種々の系圖を作つて宛然人格ある神々或は人間のやうな言行を附加する。又――

（七）歴史と地理との結合――したものもある。意ふにクロヌシの神が其子等を呑み盡し、ゼウスが父を強制して吐き出さしめたことの神話は、クロヌシのカルダヤが、其子等に當る國々を併呑したのを、ゼウスが叛旗を翻して父クロヌシのカルダヤ國に抵抗し、父の位を退けて、再び以前の子たる國々を建成したことを謂ふた歴史が、神話化せられて傳へられた趣がある。西洋學者が Kronos 卽ち「黑」を

Kronos 卽ち「時」と解するは誤りである。此點に於て、神話は寧ろ神史或は太古史の太古史と謂ふても可いやうである。

舊來の神話學者——希臘神話は、從來世間一般も、凡ての學者も、歐羅巴の希臘の神話——其地で有つた神話的事件であると考へ又信じて居たが、今吾々日本人の頭腦と知識とを以て新研究を加へて見ると、從來の信仰は根本的誤謬であつて、實は此等は亞細亞全土に於ける神話であつて、其れが何れの時か、如何にしてか西洋の希臘羅馬に傳へられて、希臘神話、羅馬神話と謂はれるやうになつたものに過ぎぬので、希臘羅馬神話は實は亞細亞神話なのである。

東洋研究の不足——從來の此誤つた考へは、東洋研究、日本研究が未だ西洋人の間に十分でなく、比較材料や、日本語の知識が無かつた爲めに、其等神話に正當の解釋や判斷を下すことが出來なかつた爲めである。

語源學の不足——西洋神話學者の語源學の力は思ひの外薄弱で其結果には誤謬が多い。彼等が下す神名、人名等の意義の解釋などは容易に信ずることが出來ぬ。其

例は無數にあるが一例を擧げるなら、自分で兩眼をくり拔いたオイヂポス(Oidipus)なる人名は、西洋の學者は「Oidi膨る」+「Pous足」=「大足」「膨れた足」と解釋して平氣で間違つて居るが、實は O-didi-mos「光を明らかに見る」を意味する人名である。其れ故に其神話に光明關係の人名、事件が多いのである。且つ西洋人が日本の惡七兵衛景清の傳を知つたなら、必ず思ひ當るであらう。何故ならば景清は景を淸く見るを意味し、彼れの傳には目、日月、光明、暗黑の語が經となり緯となり、又兩眼をくり拔いた話を始めとして凡ての事件が全く同じであつて、本來の「オイヂポス」の意味は「膨れた足」でなく、「大に光を見る」と解すべきことを悟るであらう。是れは一例に過ぎぬが、西洋人は此方面に於て頗る愚鈍な所がある。其れのみならず、東洋の比較材料を持たぬ大々的弱點がある。

東洋的、日本民族的——希臘民族は、種々の方面から研究して、最も東洋的で其れを完全に研究するには東洋的知識が必要である。特に希臘民族の太古は日本民族的で兩民族は確かに親密な關係がある。そして希臘の太古の彼れに傳はらぬ事が日

本に傳はつて居る事甚だ多く、又日本に傳はらぬ事が彼れに傳はつて居ることも少くないから、若し希臘神話を十分に知らうとするには、是非日本語、日本古代の知識が必要である。是等の知識なくして完全に古代希臘の事物を知ることは困難である――否。希臘のみではなく、世界の事物を知る上に於ても日本語や日本事物の知識は極めて重要であることを一言して置く。

今の希臘の產物に非ず――希臘神話は單に美しいばかりでなく、又雄大なものであるが、今の希臘國は何うであるか。日本の九州程しか無い小國。――此小國を舞臺にして此樣な偉大な神話が出來るものであらうか。吾等は然りと信ずることが出來ぬ。希臘神話は決して歐羅巴希臘の產物では無い。其れは世界神話、世界太古歷史、言語學、地理學の比較研究で立論される。且つ希臘神話自身の內容研究でも、神話地理は今の希臘では合はぬ。說明が出來ぬ。之れに反して比較研究上其地理の着眼を變じて之を東洋に移し、世界文明の起源地移動地方面に見當を付けて希臘神話地理を研究すると、其神話の美なる理由、偉大な理由も得心が行き、地理も亦見事に

說明が付き、希臘神話は一層の光明と利益とを世界の太古學に與へることになる。若し希臘神話が單に希臘のものとすれば、何故バビロニヤ女王セミラミス時代のはなしと云ふピラムスとチスベの事などが希臘神話中に入れてあるか。之れは希臘神話は西洋希臘のものでないことを裏切りして居る。

比較神話――余の此著述は素より希臘羅馬神話を、神話そのまゝ、物語そのまゝを述べることを主旨としたものだが、又間々種々の神話特に日本の神話傳說等を對照比較して、興味を添へると同時に神話に關する知識の眼界を擴大し、從來の神話學者の誤つて居た考へを正し、尙ほ又進んで研究をしようとする人の爲めにヒントを與へ指針となす積りで、此點に於ては、本書は西洋でも日本でも、從來の希臘神話書に類の無いものと信ずる。

神話地理の東漸――人類歷史の起源地は西部亞細亞、亞拉比亞方面であることは今日までの學說の殆んど一致して居る所であるが、希臘神話の起源地も亦同じことで、天地開闢の神話や、ウラノス、クロノスの神代は西部亞細亞、亞拉比亞、東部

阿弗利加であつたやうだが、ゼウスがチタン族と戰うた時以後、又ヂウカリオーンの洪水以後は、神話地理の中心は印度河を東へ越えて漸次に印度に移り、緬甸、暹羅、阿南まで及ぶやうになつたことは、新研究の發見する所である。思ふに是れは希臘神話系の民族が東漸して、希臘諸民族の土地が出來、そして神話地理地名等を新しい土地に寫し、新に神話を構み立てるやうになつたのであらう。されば重ねて云ふが――希臘神話は名は希臘神話であるが、現在歐羅巴にある希臘の神話ではなく、全く東洋で出來た神話である。又希臘民族も東洋――印度古代の希臘民族が西洋に移住して、其神話を今の希臘に持ち傳へ、又地名をも寫して、東洋希臘民族の神話が、西洋希臘の土地のものであるかの趣を呈したものと考へられる。

東洋地理に同收せよ――其れだから古來神話學者は希臘神話の地理的說明に盡く窮して居る、故に誤つて居る。かのペルセウス地理、ヤソン地理、ヘーラクレース地理等を始め、ユリセースの漂流記の地理の如きは、殆んど彼等は解釋し得ぬ、解釋したら誤つて居る。然るに之れを亞細亞神話として其地理を世界四方に擴げて

研究する時は明瞭正確、針の尖を以て其等の土地を一々指し示すことが出來るのである。

神話と地理との離る可からざる關係――吾々の新研究からすると、神話と地理とは如何にしても離れることが出來ぬ關係になつて居る。單に國土山川都市等が人化されて居るのみでなく、凡ての神話――神々の神話、英雄の神話、天文、季節、曆の神話等殆んど凡て地理に關係を有して地名となつて居る。例へば天文現象の大きなものでは朝は亞細亞(Asia)の名となり、夜は歐羅巴(Europa)となり、日中は阿弗利加或はエチオピヤ(Africa, Aethiopia)となり、雨或は天は亞米利加(America)となつて居る、アポローンの子ファイトーン神話の獸帶の天文記事は印度の地理に關したもの。曆法神話が地名となつて居るのはベレロフォーンの神話の中に其例を示して居る。馬人サギタリウスは亞拉比亞を代表し、ヘーラクレースは內恆河の地、卽ち古のグプタ國を代表して居る等は其例である。從來の神話學者に此やうな地理的の考へは全く無かつたやうであるが、吾々新研究者は明確に其親密な地

理的關係を見る者で、神話研究には地理研究が必ず伴はねばならず、又古代歴史地理のみならず、現在の國名地名等の研究には、神話なくては知れぬものが甚だ多いことを明言する者である。

歐羅巴は亞細亞の摸寫――亞細亞は朝の國、歐羅巴は夜の國で、歐羅巴は東洋人の移住、開拓、命名したものである。其れ故に神話地理の實際に於ては亞細亞であらねばならぬ筈のものも、歐羅巴に其地名が在つて、其神話は歐羅巴のものであつたかの觀を呈することがある。例へば希臘神話に伊太利云々の事があるが、其伊太利は歐羅巴ではなく、亞細亞の馬來半島を云うたもので、伊太利の希臘羅典語源Itali と、馬來の羅典希臘語源 Malaci とは對譯される語であり、地形も地勢も殆んど同じであつて、彼れの伊太利半島は馬來半島の寫しであることが知られる。日本の伊豆半島も亦馬來の寫して、同じ意味の希臘語源Ithyに對譯され、何れも直立、棒柱、稜威を意味するのである。希臘神話のシシリア島も歐羅巴の夫れではなうて、印度錫蘭島舊名獅子國は第一シシリヤである、次に其植民地たる第二獅子國又執獅

子國が馬來半島の東のスマトラ島の事で、希臘神話のシシリヤとは此二つの島に關して居る。日本では伊豆の大島が、獅子國、シシリヤ島の寫しである。希臘神話の希臘本部は專ら中央及び南印度を謂うたのである。さらば希臘神話を讀むものは此心して地理を考へてかゝねばならぬ。乃ち

希臘本部とは中部及び南部印度、
伊太利とは馬來半島、
シシリヤとは錫蘭島及びスマトラ島、

と云ふ具合である。

日本の諸國名、諸地名は西は歐羅巴から東は亞細亞、北は西伯利亞方面の地理を盡く縮寫して地形、地勢に應じて甚巧に、今の日本島國に寫し付けたものであるのは、實に比較地理學の面白い問題である。

神話と天文星座と地理――又神話的人間或は事物を天に上げて星の座を與へたと云ふ事がある。其場合には其れには大抵地理が有つて、其地理上の地形や位置が

天文星座に明瞭に同樣な形に描かれて有るのは吾輩の發見した所である。例へば馬人サギタリウス星座の形は亞拉比亞全體、メヂヤ、波斯地圖を形にしたもの、ヘーラクレース星座は印度恆河流域から緬甸、馬來の地圖であり、エリダノス河の星座は埃及のナイル河の圖であり、ペルセウス星座は北亞米利加（メヅサの首はメヅサの國たるメキシコの東のクバ島卽ち首島）であり、オーアリオーンの星座は同じく北亞米利加とグリーン・ランドとを別の形にした地圖であるなど、神話と地理と天文との連絡を見るは甚だ面白く、且つ學術上有益な發見たることも、自らこゝに一言して置く。尙ほ天文星座圖の研究は將來面白い結果が得られることを信じ、神話と地理とは實に離る可からざる關係があることを痛切に感ずる。

特に希臘神話の地理——に於ては、本書は世界獨步——神話學、太古史研究に於て、確に一時期を畫し從來西洋人等の希臘神話學や、希臘太古史を轉覆し、革命する書物であることを敢て自信する。然し、本書は一般の讀み物とするを目的とした者故、神話比較や地理に就ては詳細の說明考證等は之を避け、極めて簡單に說き去

るに止めて置いた。けれども研究精神のある人々は幸に是を基礎として自分に研究の步を進めて行かれんことを希望する——太古史、太古世界地理、太古の世界交通史、民族分布史、民族移動史、又諸民族の關係等を知るに於て、得る所は極めて多大であらう——卽ち普通の歷史なるものが敎へ得る以上の太古に溯つた歷史を意外に明瞭に敎へて呉れるであらう。此點に於て神話研究は特に有益で神話は人類歷史の母であるとの感が起る。

日本民族に取つて——希臘羅馬神話研究の必要は必至的である。吾等希臘羅馬神話を研究して、心靜かに日本の信仰や、神話や、傳說を之れに比較すると、驚くばかり同じであることを發見するばかりで無く、言語に於ては日本語と希臘羅馬語とは甚しく同じものが有り、地理に於ても日本太古の歷史地理には希臘關係が有り、太古の希臘民族と日本民族との同一を感ぜざるを得ないのである。今日に至るまで此點に氣の付いた學者が日本に一人も無かつたと云ふに至つては、日本の學界も實に憫然なるものと云はねばならぬ。

希臘太古で最も尊重し又神々の中で最も高貴の神として居るアテイナ女神は吾天照大御神の事で、アテイナなる名稱は天の大女神を意味し、卽ち天照大女神の性行等全く兩者同じである。希臘神話のペルセウスは我須佐之男尊に當つて居ることは明瞭で、其ペルセウスなる名は波斯彦を意味し、波斯の古代名稱をスシアナ（Susiana）と云ひ首府をスサ（Susa）と云ひ、須佐或は須佐之男（Susa-neos）と同じで、話の筋から云うてもペルセウスと須佐之男尊とは同じ性行の人物である。北人神話のトールの神は吾建御雷神に當つて居る。アモールとプシケ媛との神話は一言一句盡く〳〵日本の『天稚彦物語』と同じく、日本の書物にも其土地は、波斯としてある。希臘神話のヤソンなる名稱は見屋根尊或は中臣姓と譯せられる。又埃及太古年代は不明瞭の時代のヘリオ・ポリス（日代と譯す）のオシリス（Osiris Osiro-is オシロ若と譯す）の神は、日本歴史には日代の宮の忍呂別命卽ち景行天皇及び日本武尊となつて居ることも、埃及神話と日本歴史の比較研究で明確に證明せられる。又英雄の牢神たるヘーラクレース傳は日本の小栗判官傳其まゝであり、耶蘇紀元前殆ど千年

前のトロイ戰爭は耶蘇紀元後千幾年以後の源平須磨戰爭、楠正成の湊川戰爭となつて居るなど其他の例は無數で、神話として兩者全然同一であり、殊に希臘方面に、幾千年前の神話として傳はつて居ることが、日本では幾千年後の新しい時代に繰り下げて、而も歴史として改作されてあるなどを知るに於ては、日本歴史の誤謬か、虛欺か、僞作かの歴史を根本的に——正當に、而も雄大なる、見事なる民族史にする事に於て、希臘神話及び其他との比較研究は、日本人に取つては大必要、——緊急、必至の事である。

本書の目的——は素より神話學の研究、歴史の比較研究でなく、單に希臘神話を其まゝとして傳へるにあるが、前に云うた神話學や其解釋等に就いて多少言ひ及び又神話の比較を簡略に試み、神話地理も聊か新研究を加へて、詳細の考證等は之を避けて、其結果のみを一言して置くにとゞめた。

固有名詞の發音法は、古代希臘の發音に近いと思はれるものに從ひ、英語や獨逸流の發音は一切取らぬが、餘りに今まで日本に行はれ來たものは間々其まゝにした

ものもある。又古くから日本に傳はつて居た言語及び名稱に關して、比較上正當に其れに當る希臘の其れは多少日本的にしたものもあることを、一言して置く。

本書は素より日本人一般の讀物たることを目的にして書いたものだが、又世界太古史、比較民族史、神話學等の世界最高等の學者の唯一の參考書たることを期して書いた所の、世界唯一の希臘羅馬神話のオーソリチーたることの自信がある。日本の學者は世界を敎へる氣慨がなければならぬ。日本から其種の學者の出ることを日本人は嫌ふであらうか。

第一部　神々の神話

第一章　世界始原神話

——天地開闢より洪水まで——

天地開闢——天地はどうして出來たか。神々はどうして生れたか。人間は何者に造られたか——或は神々は先づ在つて天地は神々に由つて造られたか。若し人間は神の造る所であるとしたら、どうして造られたか——是等の疑問に對しては世界種種の神話や種々の宗敎は種々に答へるが、希臘神話は吾等に如何に敎へるか。

吾等は此に希臘神話と謂ふけれども、希臘神話の傳へる所は必ずしも一つでなく、種々多數の一致せぬ傳說がある。其天地開闢や、神々や、人間の起原を說いて居る神話詩人にホメーロス、ヘシオドスやオルフェウス等が有つて、西洋人や從來の神話學者等は、ホメーロスを以て第一古いとして居るが、實はホメーロスは其等の中

最も新しいもので、其最も古いのはオルフェウス（開闢を意味す）、次はヘシオドス（鹽土即ち道の神を意味す）、次がホメーロスであつて、開闢に就て言ふ所は甚だ簡單である。

オルフェウスの開闢說——に據ると、始めに無始の時なるものがあつて、其れから渾沌なるものが生じ、其れの中に夜と霧と、火の如き大氣エイテルなるものが生じ、時は火の如き大氣を中心として霧を回轉して、其れを鷄の玉子の如きものとなし、其れが急速の回轉に由つて二つに判剖れて、一は天となり、他は地となり、其中心から愛なる神を生じたと謂うて居る。

ヘシオドスの開闢說——に據ると、萬物の始めに渾沌なるものがあり、次に廣い胸のガヤ即ち地が生じ、雪を戴くオリムポスの高山も、又暗い奈落の底に住む所の神々も、皆此大地の上に存在することが出來るやうになつた。次に神々の內で最も美麗なイロスの神が出來た。此イロスの神は色の神、色彩の神、又愛の神である。此愛の神の力で男女兩性なるものを結び付けて子孫を生すやうになつた。

そして渾沌から生れたものは天の下の暗黑たるエレボスの陰府と、地上の暗黑たる夜とである。夜とエレボスとが合うて、天の光たるエイテルと地の光たる晝との二人の子が出來た。

最後にイロスは母たる地ガヤに觸れて燦爛と星きらめく天たるウラノスと、高山と大海とを生んだ。此うしてウラノスとガヤと即ち天と地とは宇宙最初の支配者となり、新に生れる神々の祖先になつたと謂うてある。

今若しヘシオドスとオルフェウスとの開闢說を併せて之れを日本所傳の開闢說に比較して見ると其同であることは、一見直ちに知ることが出來る。試みに日本書紀の文章を引用するならば

「古、天地未だ剖れず、陰陽分れざるの時、渾沌たる鷄子の如く、溟涬りて牙を含めり。其淸陽なるものは薄靡き天となり、重濁るものは淹滯て地と爲る。精妙の合へるは搏き易く、重濁の凝れるは凝り難し。故に天先づ成りて地後に定まる。然る後神聖其中に生ず」

と其渾沌を謂ひ、陰陽を謂ひ、鷄子を謂ひ、其剖判を謂ひ、天地を謂ひ、中心の一つ

の神を謂など、全くヘシオドスやオルフェウスなどの開闢說と同一である。從來日本の學者等は、吾日本書紀の開闢說は支那の書物から盜んだものと言うて居るが、實は世界共通の思想で、日本民族も、始めから此傳說を有つて居り、支那の書物の如きも亦其一つに過ぎぬので、決して支那起原を謂ふ必要はない。寧ろ之を逆にして却つて支那人等は日本太古の傳說を傳へたものと謂ふが正當である。又若し穩當な言葉で謂ふならば上古に溯つて人類一原說を立てたら可いのである。其れ故に東西諸民族の神話には共通のものが甚だ多い。

ウラノスとガヤとの一族——天地の成り立ちは此うであるが、次に希臘神話は原始の神々及び其一族に就て語り、其等神族に三時代卽ち三朝あるにとを謂うて居る。卽ち(一)ウラノスとガヤとは最初の天地の支配者であり、(二)次にクロヌシとレヤとの神代となり、(三)終りにゼウスとヘーラとの神代となるのである。

第一神代たるウラノスとガヤ卽ち天と地との子等を分類すると(一)チタンの神(二)キクローブスと云ふ目一箇の神々、(三)ヘカトンキレエスと云ふ百手或は

百工の神々の三神族となる。

チタン族——に六男六女の十二神がある。神話學者の云ふ所に據ると多くの神神は日に關したものだとのことであるが、寧ろ曆に關して居る。十二神とは——

(一)オーキアノス——大祖を意味し、神々の大祖先と云はれ、海の神、沖の神であり、日本語の『翁』なるもので、曆の十二支では子に當り、月では睦月(一月)に當つて居る。

(二)テーツス——はオーキアノスの妻で河の神々、海の仙女等の母であり、豐富と新鮮とを意味し、丑に當り、又更衣(二月)に當つて居る。

(三)ヒペリオーン——は若き太陽を意味する男神、寅に當り又彌生(四月)に當つて居る。

(四)テヤ——は豐かに裝はれたる美觀を意味する女神、卯に當り、う月(四月)に當つて居る。

(五)コイオス——は登り立つを意味する男神、辰に當り、又さ月(五月)に當る。

（六）フオイベ――は最も高き太陽を意味する女神、巳に當り、みな月（六月）に當る。

（七）クレイオス――は觀望を意味する男神、午に當り、ふみ月（七月）に當る。

（八）ヤペトス――は遠く延長し、茂ることを意味する男神、未に當り、又葉月（八月）に當る。ヨウリピヤは又此神の一名であるが、西洋の神話學者が別神として居るのは誤りである。

（九）ムネモシネ――は記憶と、長く保つことを意味する女神申に當り、長月（九月）に當る。

（十）テミス――はま直に伸びることを意味し、正義の女神で、酉に當り、かみな月（十月）に當る。

（十一）レヤ――は自由、容易、白霜等を意味する女神、戌に當り、霜月（十一月）に當る。

（十二）クロヌシ――は黒主で晦蒙、極、暮れ、舊臘を意味する男神、亥に當り極

月（十二月）に當る。

されば**チタン**の神々は日光や、暦に關する神々のやうで羅典詩人等が、「チタン」の語を日や日光の意味で使用して居る理由が解かるが「チタン」なる語は日や日光を意味するのではなく、別に意味がある。次に――

キクロープス（**目一箇の神々**）――は日本書紀神功皇后紀に「聞聾大驚」とあり、之れに三つの神がある――

（一）ステロペース――電光。日本の表筒男神に當る。

（二）ブロンテース――霹靂。日本の中筒男神に當る。

（三）アルゲース――電箭。日本の底筒男神に當る。

百手或は百工族の神々――は

（一）ブリアレオース――一名アイガイオン――强力。突擊。重槍。

（二）ギエース――鋤

（三）コットス――鎌

以上はウラノス(天)と、ガヤ(地)との一族であるが、其内キクロープスの神族と、百工の神族とは父ウラノスの神は之を恐れて無間地獄に押し込んで滅ぼさうとした。

クロヌシの謀叛——母なる地卽ちガヤ女神は之を憤つてチタン族の神々に其救濟法を相談したけれども誰も應ずるものが無かつたが、只悧巧なクロヌシ一人は母の需めに應じて、燒鎌の鋭鎌を以て父を待ち伏せして、其局所を切つた。其切口から流れ出た血が地に落ちて生れた神々は第一に忿怒と復讐との三女神フリヤで、フリヤとはアレクト、メガイラ、チシホネ三女神の總稱である。又之をエリンネとも謂ひ、纒着く蛇を記號とし、永久に人間の業に對して附き纒はり、追窮する女神である。次に巨人族、次にメリヤンの仙女卽ち流れ、或は河々の女神等である。ウラノスの切られた局部が海に投げ入れられて、其泡から生れた神は美と戀との女神アフロヂテ(淡路と譯す)である。

ウラノスの神は斯うして位を退けられて後は神話上何等聞える所がなく、世は天下をねらうたクロヌシの神代となつた。

クロヌシの神代——此狡猾な方法を以て父を襲撃し、又父の詛の下に創建せられたクロヌシの神代は、始めから、永遠のものたることの出來ぬやうな運命が定まつて居た。かのウラノスから生れ出た原始的神々は又同じく原始的元素の子孫たる海の女神、海及び陸の怪物等であつて、テーツス神神は大洋の神に合うて渦まく河々や泉や森の仙女を生み、ヒペリオーンとテヤ女神とは日、月、及び東雲の父母となり、東雲の神は風と曉の明星との母となり、天地を支持するアトラスの神、前見の神たるプロメーテウス、後智の神たるエピメーテウス等は他のチタンの神たるヤペトスの子として生れた。

クロヌシとレヤとは天と地との新しい別名で、ヘスチヤ、デーメーテール、ヘーラ、プルトーン、ポセイドン及びゼウス等の兩親になり給うた。

黃金時代——チタン族の性質には聊か矛盾のやうでは有るが、神話の傳へる所に據ると、クロヌシの時代は世界は所謂黃金時代なるもので、凡ての物は皆其所を得て、地は樂園のやうであり、人の心は盡く純粹無垢で、眞理と正義とは普く行は

れ、何等法律の强制と云ふものはなく、權力の命令もなく脅迫なるものもない。森は自然のまゝて、船を造り、城塞等を築く爲めにと、斧が傷ふことなく、人は刀や槍や甲冑、弓箭などを用ゐず、耕すことなく種まくことなく、地は自ら必要のものを人間に供給し、世は常世の春でいつも花さき、河は乳と酒とに溢れ流れ、甘き蜜は槲の木から露を滴らし、日の光に照らされて紅を染める林檎や、活きかへると云はれる無花果、黄金の色なす橙、瑠璃色をして長く垂れ下る葡萄、其他苺、甜瓜等は時を得顔に榮え實のり、人間には疾病衰弱苦痛なく、白髮と云ふものはなく、益益若やぎ、身體愈々强壯に、年は寄るとも、みどりの黑髮いや黑く、壽長く、げに何事も心にかなひ、天地は一家であり關の戸さゝで通ふと云ふべき時である。若し夫れ現世に疲勞して一度永き眠に入る時は形骸は忽ち消えて跡を止めず、魂は樂しい夢中に遊離し海山遠く、西方極樂淨土の、花咲く國に、いと幸福に住むと云ふ。

チタン神族とゼウス神族との戰爭——然るに此黄金時代を造つた所のクロヌシの神は、土地と、星のきらめく蒼天——即ち天の曆數——から敎へられて、自分の運

命は其子等に由つて轉覆せらるべきことを知つて生れる子等に注意し、子の神々が生れると直ちに之れを呑み盡くした。最後にゼウスの神の生れる前、母レアは夫を欺くためにクレタの地に行つてゼウスを生み、これをアイガイオンの岩窟に隱匿し、其養育を其地の仙女アドラステヤと、イダとに委托して、歸つてクロヌシには襁褓に包んだ大きな石を與へたら、クロヌシは直ちに他の子のやうに之れを呑み込み玉うた。

クレテに匿された、嬰兒のゼウスの神は、アドラステヤと、イダとの二人の仙女にかしづかれ、アマルテヤなる山羊の乳にて養はれ、山の靈なるクレテース等は、晝も夜も軍歌を謠ひ、軍舞を舞うて嬰兒の泣く聲が、クロヌシに聽こえぬやうにと力めた。ゼウスの神はやがて成人して、祖母レヤの助力に由つて父のもとに歸り、父クロヌシに、今まで呑み込まれた五人の兄弟姉妹の神々を吐き出さした。されば第一に出て來たのはかの大きな石で、ゼウスは之れを紀念として、デルフォイに保存し玉うた。此うしてレアの子等は次々に吐き出されて、父なる神の天理に背いた

所行に對して熱心之れに復讐しようと企てた。

戰爭は開始まつた、クロヌシに味方する神々は其兄弟姉妹や凡てのチタン族や又た其子等であつて、ゼウスに味方する者は曩にクロヌシから吐き出された兄弟姉妹や後代オリムピアの神團を作る神々である。クロヌシ等はオトリス山を本營とし、ゼウス等はオリムピヤ山を牙城として相對陣して居つた。然し、かのチタン神族中でも、正義の女神テミスと記憶の女神ムネモシネとはチタン黨を脱してゼウス軍に歸順し、前見の神プローメーテウスも亦オリムピヤ軍に味方した。

戰爭續くこと既に十年、何時終るべきか明らぬ。ゼウス思ふにチタン族の勢力に打勝には又他のチタンの力を藉り、彼を以て彼を擊つべきであると。そこで曩にクロヌシが無間地獄に投入れた所の目一箇の神々や百手神族を地獄から援け出して彼等を味方に加へた。ゼウスは此有力な加勢を得てオリムポスの山の巓から間斷なく雷霆の箭を射降したから地は火焰を上げて鳴り動き、大洋は沸騰し、熱い烟は蒙蒙と立ち登つてチタン族を包圍し、雷電は彼等の目を燒いて、盲にした。之れと同

ゼウスとチタン族との戰爭

時に三種の百手神族は三百の手を以て岩や石を投飛ばした爲めに、チタン族の神々は、皆其岩石の爲めに埋められ、遂に無間地獄に幽閉せられて、百手神族が之れを監守して居る。其内ヤペトスの子なるアトラスは、懲罰として蒼穹を支へ永久之を擔ふの苦役を宣告せられた。謀叛の發頭たるクロヌシの神は戰爭に倦んでヘスペリヤ（西偏夕日の國）に退いて其處に國家を造り長く平和に繁榮して居つた。

チフォーンの謀叛——ゼウスはチタン族を滅ぼしたが尙ほ新な戰爭を戰はねばならぬ。何故なれば祖母ガヤの神はクロヌシに

對してはゼウスを援けたけれども、其子なるチタン族が受けた殘忍な運命を見ては、良心の苛責に堪へず、其勝利者に復讐するの念を起した。時にガヤは新にチフオーン（シフォーン卽ち「管」の訛）なる子を生んだ。此子は前のチタンよりも一層有力なもので、頸には百頭の龍があり、目からは火の箭を射出だし、其黑い舌は、蛇の音、野牛の聲、獅子の吼、犬の叫びを爲し、或は喇叭の如く或は叫びの如く、時には又神々の言葉を出した。其恐ろしさに、神々はオリムポスの山から埃及へ遁げ、ゼウスは山羊に姿を變へ、ヘーラ女神は鳥になり玉うた程である。然し是れでは餘り臆病だと思ひかへしてゼウスの神は電擊を以て之を沈默せしめて、遂には又彼れの兄弟の居る所の無間地獄に追ひ込んだが、彼れの鬱勃たる不平は今も尙ほ熄むことなく、數々噴火山に破裂して、其火焰の舌鋒を噴火口に顯はし、或は熱風となつて草木人禽を燒き殺すことを爲る。

ウラノス餘類の謀叛——尙ほ是より後、ウラノスの負傷した血から成つた鬼神等は、オリムピヤの神々に對して、新に叛亂を企てたが、是等の神々はチタンやキク

ロープスや又はチフォン等のやうでなく、寧ろ人間に近く野獸の皮を着物にし、石や樹の皮を以て其身を被うて居る。彼等の下半身は蛇のやうで形態は甚だ醜惡である。彼等は人間のやうに「土地生れ」の名が有つて、其性質を觀察するに、一種歷史前の人間で頭腦が熱して理性のない者のやうである。其等の鬼神の內の最も力强いものは寒い風と氷の山とを代表して居るアルクオネウス、バラス、エンケラドス、又其等一團の首領たる火の王ポルフュリオンや、其他等である。是等の鬼神に對する戰爭には、天の新朝廷の神々たるヘーラ女神はアルクオネウスと鬪ひ、アテイナ女神はバラスとエンケラドスと、ゼウスはポルフュリオンとヒペルビオスと、アポローンはエフィアルテースと、ポセイドーンはポリボテスと鬪ひ、盡く之れを破つて、是等鬼神族をチタン神族と同じく永久暗黑の無間地獄に追ひ込んで仕舞うた。

白銀時代——是れと同時にクロヌシの黃金時代は過ぎ去つて世は今や白銀時代になつた。ゼウスは春季を短縮して一年を四季に分けたから、人は寒さ暑さに惱やみ、家の必要が起り、岩屈を住居と爲し、木や枝葉を組み合せて小屋を作り有巢氏の民

となり、穀類は種まき植付けの勞力なくては得ることが出來ぬやうになり、農夫は額に汗し、牛馬を苦使して地を耕さねばならぬことゝなつた。そして人が死んだ時は、ゼウスは彼等を下界に下して幽靈とはするが、不死の生活の特權は之れを彼等に與へなかつた。

人類の起原——人類起原の問題に關しては、希臘人は猶太人のやうに、さう簡單に一對の人間から出たものとせぬ。一般の信ずる所に據ると、人間には樹や石から出たものもあり、土地から出たものもあり、丘陵や、湖水や、沼などから出たものもあり、又た神々から生れ出たものもあり、又は人が土偶を作るやうに神が手づから人間を作つたこともあると云ひ、種々の信仰と傳說とは、時代の前後矛盾等に係はらないで傳へられ居る。詩人ピンダロスの言ふ所に據ると、神も人も本は一つで、吾等は一つの母から生命と呼吸とを得たものである。地たるガヤが、人類並に神々の母であることは猶ほ樹木が土地から發生するやうに、原始の人は土地から生れ出たもので、文字通りに土地の子であるとして居る。

ペラスギ人は森の中から生れ出たと云ひ、アティナイ人はケクロップスから出たことを誇りとして居るが、其がクロップスの下半身が蛇體であるのは土地生れであることを示すもので、ケクロップスはゲクロップスの訛つたもの、卽ち土地の產物を意味して居る。されば、アティナの建國の神たるアティナ女神は、又ゲオルギヤ卽地を招禱者の別名がある。ボイオーチヤ人の祖先はコーバイスの湖から出たと云ふて居る。是はカヅモス神話に、ボイオーチヤのチバ人は龍の齒を蒔いて生れた民族であるとの傳說と同じものである。「オヂッセー」の中のヅリオペ族卽ち木の芽族なるものは樹から生れたものであらう。フイリラなる木とクロヌシの神との間の子にケイローンなる者がある、是れは木の司を意味する民族である。是等の外に又た神々から出た種族もあつて、神々がニンフなる仙女と結婚した子孫が人間となつたもので、諸帝王の祖先は大抵此種に屬して居る。

プロメーテウスとエピメーテウス——哲學者プラトーンの頃までは、人間は土と火とから出來て居るもので、神が人形を作るやうに土と火とを揑ねて作り上げたも

のと言ふて居た。此思想の最も古いものは、神話上の年代の前後矛盾は之れを問はぬ事にして、プロメーテウスと弟エピメーテウスとが、神々から動物及び人間に諸々の性質を與へることの命令を受けたとの神話に現はれて居る。其の神話に據ると――昔はたゞ神々ばかりで動物も人間も無い時代があつた。然るに其後動物や人間が創造せられる世と爲つて、神々は地球の內部から土と火と、又其兩分子の種々に結合したものを取つて凡の動物を作つた。そして神々はプロメーテウスとエピメーテウスの二神に命じて是等動物を裝ひ、其れ〴〵の性質を其等に分配せしめた。時に弟エピメーテウスがプロメーテウスに言ふに『我れは動物の性質の分配に任ずるから、兄上は其監督を爲し給へ』と。二人は之れに合意してエピメーテウスは其分配を行うた。其之を分配するには、或動物には力を與へたけれども速力は之を與へず、或ものには速力を與へたけれども力は之を與へず、或ものは之を甲ひ、或ものは甲ひなしにて、其甲の無いものには生存上他の利益を與へて、或は其體軀を大きくして防禦の用を爲さしめ、或は之を小さくして空中を飛ばしめ、又は地中に穴

を掘らしめた。是れは害物から遁れる爲めの方法である。此うして各々長所と短所とを互に平均せしめて種族の絕滅を防いだ。エピメーテウスは此やうに彼等の配當を平均して、諸動物の破滅を防ぐと同時に又天候に對して自分を防衞せしめる爲めに、或は毛皮や厚皮を彼等に着せて寒さ暑さを防がせ、又彼等の休息睡眠の自然の床と爲し、又足には蹄爪や濃い毛や硬い皮を與へた。エピメーテウスは次に彼等に種々の食物を供給して、其或ものは產兒の數を少くするが、其食物たる動物の生產は之を饒にして其種族を保存せしめた。エピメーテウスは此う云ふ具合に諸動物の固有性の分配をしたが、彼れの性質は嚴く急で、又餘り賢くなく、人間の固有性は未だ分配されないで、其順番が人間に來た時は、分配すべき固有性は、已に諸動物に分配し盡して、人間に與ふべきものは殘つて居らぬやうになつた。此時プロメーテウスは其監視に來て、人間のみは獨り裸體で、靴もなく、床もなく、又防禦の武器もないのを見て、遂に其救濟策を考へ出し、竊に智慧の女神アテイナと鍛冶の神ヘーファイストスの工場に忍び込んで、智力と火とを使用するの術を盜んで來て之を人間

に與へたから、人間は始めて生活の方便を得たのである。然しプロメーテウスは之れが爲めに其後盜賊として捕縛せられた——とはプラトーンの言ふ所であるが、プロメーテウスの捕縛に就ては尙ほ悲壯切痛な神話がある。

プロメーテウスの義俠——クロヌシの神代の黃金世界は、ゼウスの神代になつて白銀時代となつた。ヘシオドスの言ふ所に據ると、此時代に極樂に往生したもの〻供物に對して、神々は其相當の事を爲なかつた爲めに、チタンの遺族たるプロメーテウスは之を憤慨して、人間に味方し、オリムポスの神々に反對して立つた。何故なれば、ゼウスの神は人類に火を與へることを惜んで、人類の全滅を計り、別に新な人類を造らうと思ふて居たからである。

プロメーテウスは人間の狀態を見るに、黃金時代は去つて世は艱苦の世となり、彼等は暗黑と勤勞と寒氣との爲めに苦しんで居る。プロメーテウスは同情の念に堪へずして思ふに、若し『火』さへあつたなら人間は此うも苦しむことは無いものをと。義俠の氣は勃然として禁ずることが出來ず、オリムポスの神山に登つて、人間に火

を與へることを大神ゼウスに懇願した。ゼウスは之を許さずして曰はれるに、若し人間に火を與へる時は。彼等必ず力を得て神々に反抗し、神々と權勢を爭ふやうになる。彼等は永久に火なく無知の狀態に在らしめたが善いと。

然しプロメーテウスは如何にもして火を得て之れを人間に與へ度いものと、遂に竊に天上に登つてゼウスが秘藏して居る火を盜み、竹の筒に隱して持ち歸り、之れを人間に與へたとのことである。

一說に據ると、義俠なプロメーテウスは、オリムポスの神々の無情なことを憤つて、是から後は神々に對して敬意を排ふことをせず、一日海濱に行吟うて一莖の葦を見出し、其れを折つて見るに其髓は甚だ火に燃え易いやうである所から、其葦の筒は、火を保つことが出來ると思ふた。そこで彼れの獨立自尊の精神は大に喜んで云ふに、我れ能くゼウスを賴まずとも、直接太陽から火を得て見せると。直ぐ東の方に飛んで行つて、朝、太陽が東の方に火の輪となつて上る時其葦の髓を指し付けて太陽の火を之れに移し、葦の筒に入れて持ち歸り、其火を種として篝火を作り、

人間一般に分配した。人間は之れから火食を知り、暗夜には光明を得、金屬を細工して種々の器具を作ることを知り、一切の智識と能力とは是れから大に啓發して、人間の幸福を增し、人々はプロメーテウスに其大恩を感謝した。(是れは支那歷史の燧人氏に當つて居る)。

美女パンドーラの創造——ゼウスの神はプロメーテウスが秘藏の火を盜んだことを怒つて遂にプロメーテウスと人類とを罰する決心を起し、先づ一人の美女を作つて之に由りて人間界に災厄不幸を與へることゝなつた。其方法として、ゼウスは鍛冶の神ヘーファイストスに命じて美麗無雙の女體を作らしめた。素よりこれは形骸ばかりで未だ靈魂は無いのである。

女體はヘーファイストスの巧妙な技術に由つて作られて、神々の前に持ち出されたそこで大神ゼウスの發議に由つて、此女體の像に、凡ての神々は其れ〳〵好いものを與へることゝなり、ゼウスは先づ之れに生命を與へ玉ふた。其他の神々は、或は之れに可愛らしい眼を與へ、或は之れに藝術を與へ、或はこれに美しい聲を與へ、

或は之れに優しい美の態度を與へ、或は之れに藝術を與へた。神々は此く凡てのものを與へたから其意味で此女性をパンドーラと名付けた。『取りよろふ』を意味する名である。此の通り一切の美を備へたパンドーラはヘルメースの神に手を引かれてオリムポスの神山から持ち降されて、エピメーテウスの妻として與へられた。エピメーテウスは其美を見て之れに戀慕し、兄たる前見の神プロメーテウスが警戒したにも係らず、パンドーラを我家の妻にした。然し此美人は實はゼウスが人間世界に不幸を與へようとの計略上のものであつた。

ゼウスの神は此美しきパンドーラが下山する時、一つの玉手箱を與へた。其時敎へられた所では、無數の寶物が容れあるとのことであつたが、公平正義仁慈のアテイナ大女神は堅くパンドーラを戒めて、決して其箱を明けるなと告げ玉ふた。

然るに人性は弱いもの、特に女はさうである。パンドーラはアテイナ女神の敎戒を忘れて細目に手箱を明けて中を伺ふた——あゝ明けて悔やしや、これ人類不幸の源泉である。箱の中からは惡疫、痛風、レウマチズム、疝痛、嫉妬、怨恨、復讐等の、

肉體及び精神上の諸惡は無數の蒼白い厭ふべき怪物の姿となつて跳び出し、室内をかけ廻り、やがて又室外に出て人々の家を見舞ひ、世間一般にひろまり、大恐惶を來した。パンドーラは蓋を閉める遑なく、僅かに蓋して箱の中に殘つたものは唯一つの空しき『希望』と云ふものばかりであつた。

プロメーテウスの苦しみ——ゼウスの神は此く一方にはパンドーラの手箱を以て人類を罰すると同時に、又プロメーテウスを罰する爲めにプロメーテウスを捕へて、鐵の鎖を以てカウカソスの岩角に繫ぎ、寒風膚を裂き、堅氷骨を刺し、厭くこと知らぬ黑鷲に其肝臟をついばむに一任し玉ふた。プロメーテウス若し一度ゼウスに謝罪して屈伏さへしたら此苦痛は直に赦されるのだけれども、豪毅不屈のプロメーテウスは一度として悲しい聲を洩らしたことなく、屈せず、悔いず、巍然として無數の年月、肉體上、精神上の有らゆる苦痛を堪へ忍んだ。されば此處を過ぎ行く神々も人間も、禽獸も其偉大な忍耐力と義俠とに對して、涙を流して感歎せぬものはなかつた。

且つプロメーテウスは前見の神である、此後第十三世に當つて、自分の子孫の中から一英雄が出て自分を救ふことを知つて居る故に、其巍然たる態度は決して變らぬ。プロメーテウスは實に後世、暴虐壓制に反對する所の義俠と忍耐との大模範である。詩人バイロンのプロメーテウスの詩がある——

「あゝチタン。汝の不死の其目には
全人類の苦しみは
げにも悲しき、其現實に觀ぜられ
神々達の思ふこと、輕きものには非ざりき。
されど汝のあはれみの、其れが報いは何なりし。
無言の苦しみ切痛に
鐵鎖と、岩と、死驚ぞ。
苦痛は如何に激しきも、
心の誇り、如何ぞかは、おもてに之を表はさん。」
聽く者あらぬ時にのみ、ひとり其身に語るのみ。
天もし聽かばそねみなん。

遂に聲も絶えんに。

神の如きの汝が眼は、たゞ人間の愛にして、
彼の敎の力もて、其苦しみを少くし、
人は自身の心もて、自ら強くなれかしと、
力めしことも神々に妨げられて、あだなれや。
さあれ不屈の汝が力、
堅忍不拔の精神は
いかなるものも援ねかへし、
天地と雖、決して彼を飼し得ず。
此かる偉大の敎、たゞ吾等は此に受け攝げり。」

此後、プロメーテウスの前號した通り、其子孫の中からヘーラクレースと云ふ英傑が出でて、プロメーテウスとゼウスとの仲を調和し、是れからゼウスの、チタン族及び人間に對する態度は改まり、プロメーテウスは其繫縛を解かれてオリムピアの始めの位に復つて神山の豫言者、思ひ兼の神となり、人間も亦神々の愛情と、種々

の恩惠とを受けることゝなつた。

赤銅時代と黒鐵時代——黃金時代は最も早く過去り、白銀時代も亦去つて次は赤銅時代になつたが、此時代の人間は强力な軍人で、性情に於ても身體に於ても前きに神々と戰ふたチタン族に似たもので、彼等は生命の日光を避けて居た。最後に黑鐵時代——は來て人間の心は益々險惡になり、苦勞と不幸とに重壓せられて父母を尊敬することを知らず、暴慢と殘忍とは尊重せられ、正義や禮節は人間界を不幸に委せてオリムポスの神山に引揚げた。されば前には神と人とは和睦して居たが、今や人は神に對して敬虔の心を有たぬやうになつた所から、オリムポスの神々は遂に人類を絶やし盡さうとの決心を起こし玉うた。

ヂウカリオーンの洪水——神々は思ひ玉ふに、人類を滅ぼすにも若し火を以てする時は、或ひはオリムポスの神山に燃え移るの恐れがあるから、水を以てするが善いとのことで洪水を降して全世界を溺らすこととなつた。

時にプロメーテウスの子ヂウカリオーンと、エピメーテウスとパンドーラとの娘

ピルラとの夫婦の者が有つて、神を信じ、正直善良の人で、常に人々の凶悪殘忍なことを戒めて、神罰の恐るべきことを說いて居つた。或時彼れ神山に父プロメーテウスを見舞ふたら、プロメーテウスは、神は今や洪水を降して人類を滅ぼさうとして居るから豫め其準備をせよとの事を告げた。ヂウカリオーンは下山して直に箱船を作り、種々の必要物を多量に積載せて、避難の方法を全うして置いた。

時は來た。天は大雨を降らし、數日數夜遂に數月に亙つて止まず、ゼウスの神は己の有つて居る雨では足らぬと云うて、弟の海の神ポセイドーンの水までも借りて來て、遂に洪水を以て凡ての土地を蔽ひ世界の山々は盡く海の下に隱れて、人間も動物も絕え滅び、獨りパルナスソスの山の嶺ばかり僅かに波の上に一點の島となつて殘つた。ヂウカリオーン夫婦は豫て準備の船に乘つて波に漂ふて漸くパルナスソスの山に着いた。ヂウカリオーン夫婦の者は、こゝに其地の仙女や神託を司つて居るテミス女神に祈禱し、水も次第に退いたから、彼等夫婦は此處に止まつて居た。斯うして二人は祈禱と供物とを神に捧げて、如何したら再び人類を增殖

すことが出來るかに就て神託を請ふた。其時の神託は『汝の頭を蔽ひ、汝の上衣を寬るうし、汝の母の骨を拾ふて後の方に之れを投げよ』とのことであつたが、彼等は暫らく神託の意義に惑ふたけれども、さすがは前見の神プロメーテウスの子である。思ふに土地は吾等の大きな母である。神託の母の骨とは石の事であらうと、乃ち其のやうにして石を拾ふて後の方に投げると、ヂウカリオーンの投げた石は男子となり、ピルラの投げた石は女子となり、斯うして人類は再び蒼生として、又益人として地上に繁殖し、ヂウカリオーン夫婦は新世界の人類の父母として尊敬せられるやうになつた。ヂウカリオーンとは良苗を意味し、苗は又ノアの語源と同じである。彼れの惣領をヘレンと謂ひ、之れからアカイオス(地姓)、イオーン(水姓)、ドーロス(火姓)、アイオロス(風姓)等の四大姓が生れて希臘種族の祖先となつた。

第二章　世界始原神話の比較研究と其地理

一　神話の比較

世界始原神話――の希臘に傳はつた者を希臘人は希臘神話と名付け、日本に傳はつた者を日本人は日本神話と名付け、支那に傳はつたものを支那神話と名付け、猶太に傳はつたものを猶太神話と名付けて居るが、今是等を比較して達觀して見ると其等は殆んど同じもので、同じ神話が諸方に傳へられて多少其傳へ方が異ふて居るに過ぎぬ事を發見し、其起原は同一であるとの判斷を下さねばならぬ事となるのである。

天地開闢神話――に在つてヘシオドスやオルフェウスの說いて居る所は日本や支那に傳へて居るものと全く同じで、始めに、渾沌を謂ひ、其鷄子の狀を謂ひ、其兩つに分れたことを謂ひ、そして天地が出來て一の神が其中間に生れたと謂ふが如き

は、如何にするとも和漢洋の神話は同一物で、同一起原であることを否むことが出來ぬ。印度のリグ・ヱダの天地開闢說も亦之れと同じものである。

ウラノスとガヤ――始めに生つた神々は希臘神話ではウラノスとガヤとで、天と地とを意味するが、支那の天皇氏、地皇氏は是れである。又人皇氏なる者である。日本に在つては古事記の首章に『天、地、初發』の語があるが、これウラノスとガヤ即ち天皇氏、地皇氏に當り、又初發なるものは一であり、ヒトツでありヒトであつて人皇氏に當つて居る。

目一箇神――殊にウラノスとガヤとの子たるチタン族や目一箇の神々は、古事記中に出て居る神々であることは、前に述べた神名表に對照した通りである。

且つクロヌシの神が、父ウラノスを斬つて、其血が種々の神々に成つたとの思想は、吾古事記に、伊邪那岐尊が迦具土神を斬つて、其血が種々の神々に成つたとの神話と同じ思想で、此の部分の希臘神話は殆んど古事記を讀む感じがする。

チタン神族――チタン神族の名と、日本、支那歷史上の人名と曆法などを對照す

ると、其間に又關係があることを發見し、所謂歴史上の諸人物が神話的のものであるとの考へが起つて來る。チタン十二神の如きは其れで、又其れが曆法關係の名であり、又地理上の國名ともなつて居るが、地理に付いては後に說く。

ゼワス神族とチタン神族との戰爭——は我高天原が出雲に對したと同じ神話で、ゼウスが目一箇の神々を味方として敵を征伏したとのことは、高天原から建御雷神、經津主神を出雲に遣はして、大國主神を說服したと同じであり、又神名の意義も同じである。又チタン族が敗れて盡く無間地獄に入れられたと同じく、大國主神は幽冥界の神となつた。且つクロヌシの神の黃金時代であつた如く、大國主神は福の神であつたことは又黃金時代を思はせる。クロヌシの神がヒスペリヤの國に移住したとの事は、大國主神が世界の西偏たる日隅の宮に移つたと同じである。又此ゼウス族とチタン族との戰爭は印度神話の帝釋と修羅との戰爭となつて居る。

有巢氏と燧人氏——ゼウスの神代になつて人は家を作ることを始めた。家は巢のことで支那歴史に所謂有巢氏の時代とは是れに當つて居る。西洋に所謂ネストリヤ

ン（Nestorian）宗の大起原は此にあるが、西洋の學者は其起原に就て誤つた說をして居る。プロメーテウスが始めて人間の爲めに火を發明して其使用法を敎へたとのことは、支那歴史の燧人氏に當つて居る。

クロヌシの黃金時代に就て——猶太敎の豫言者イザヤが世界平和を豫言して『彼等は其劍をうちかへて鋤と爲し、其槍をうちかへて鎌と爲し、國は國に向つて劍を上げず戰鬪の事を再び學ばざる可し』と言ふて居るがこれは實は豫言では無うてクロヌシ時代の傳說を變形して經文と爲たものに過ぎぬ。此事が支那歴史では帝堯陶唐氏の記事に當つて居る。堯天下を治めること五十年、天下は治つて居るか居ないかを知らず、微服して衢を歩いて童謠を聞いた。其童謠に『我丞民を立つ、汝の極に非ざるなし。識らず知らず帝の則に順ふ』と云ふて居た。老人があつて食物を口に含んで腹鼓をうち、壤を擊つて歌ふて云ふに『日出でゝ作し、日入つて息ふ。井を鑿つて飲み、田を畊して食ふ。帝の力何ぞ我にあらんや』と、又或小役人は『嘻、聖人を覩せん。聖人をして壽富にして男子多からしめん』と。堯が言ふに『辭す、男

子多ければ懼多し、富めば事多し、壽なれば辱多し』と。役人が云ふに『天萬民を生ず、必ず之に職を授く、男子多くして之に職を授けば何の懼るゝことあらん、富めば人をして之れを分たしめば、何の辱か之れ有らん。天下道あらば、物と興に昌へ、天下道なければ德を脩めて間に就く。千歳世を厭はゞ去つて上僊し、かの白雲に乘つて帝鄉に至らん、何の辱かあらん』と。次に帝舜は、五絃の琴を彈じて南風の詩を歌ふた『南風の薰ぜる、以て吾民の慍を解く可し、南風の時なる、以て吾民の財を阜にすべし』と。其時景星出で卿雲興つた。百工（ヘカトン・キレース神族）相和して歌ふて云ふに『卿雲爛たり禮縵々たり、日月光華あり、旦復た旦』と。此堯舜時代なるものは所謂クロヌシの黃金時代なるものゝ別傳と思はれる。

蛇身のケクロップスと庖犧氏——希臘神話に於ては、アテーナイ人はケクロップスの子孫であると云ふて居る。其ケクロップスは蛇身人首である。支那歴史に庖犧氏なるものがあり又蛇身人首である。日本神話に鵜葺草葺不合命がある。其葺不合の稱はフォーキシ（Phorkys）卽ち庖犧氏と同じもので、此神の母を豐玉姫と云ひ、海

神卽ち龍神の女である。龍は蛇で又庖犧氏或はケクロップスの蛇身傳說と緣があることを示すものではないか。

プロメーテウスと思兼神——プロメーテウスは思慮、前知の神で吾高天原の思兼神は全く此神と同じやうである。

洪水神話の比較研究——希臘の神話にデユカリオーンの洪水があり、猶太の古傳說にノアの洪水があり、支那太古史に禹の洪水があり、其他諸民族の神話にも世界洪水の神話が傳はつて居て其比較研究の結果は皆同じ事件を種々に諸方に傳へたものであり、又人間が太古に同一地方から諸方に移住し、繁殖したことを示して居る。

今デウカリオーンの名とノアの名とを研究すると、兩人の名は同一意義の別語で、ノア（Noah）とは希臘語「ネア」「ネオ」（Nea, Neos＝Naus）で「新」「海」「船」を意味し、デウカリオーン（Deukalion, Dyo＋Kalos）は「新・美」又は「良苗」を意味し、新世界の新人たることを意味してゐる。箱船觀念の同じことは特に之を證明するものである。世界諸民族が此洪水神話を有つてゐる中に在つて、日本民族に洪水神話

が無いやうに見えるは、一見奇異の感がないでもないが、仔細に研究して見ると日本にもそれとはなしに洪水神話があるけれども開闢神話の中に含まつて居るのである。伊邪那伎、伊邪那美の二人の神が天の浮橋に立つて滄海に浮び給ふたとは、ノアの船、ヂウカリオーンの船と同じものではないか。又伊邪那伎命の御名の語原はIzana-ageで、其語幹Zanaは若及び新、又Zanae良苗を意味し、ノアともヂウカリオーンとも同じ意味である。ノアの船はアララット山に着き、ヂウカリオーンの船はパルナソスに着き、伊邪那伎命は淡能碁呂島を得給ひ、其趣は皆一つで神話の同一起原を示すものである。

且つ伊邪那伎命は禊の神で全身水あびし給ふて新に美しくなられ、ヂウカリオーンも亦、水潛ぎ新に美しくなるを意味して同じ名である。ヂウカリオーンの妻ピルラは火を意味するが、伊邪那伎命の妻なる伊邪那美命は火の神を生んで、焼け死に給ふた神であり、ピルラの名に於て其神性の意味を表はしてゐる。

伊邪那伎、伊邪那美二神は布斗麻邇の神託を受けて神々や人類を産み玉ふたが、

ヂウカリオーンとピルラも亦神託を受て人類の始祖となつたことも日本と希臘と同じ觀念である。

尚ほ又進んで研究する時は、伊邪那伎命は希臘神話のゼウスに當る神であつて、ゼウス（Zeus）とは「生々」を意味し、伊邪那伎命の名稱の語幹はZana=Zanで、あり又ゼウスと變化する語で、兩神話の神は同一であることを知るのである。又ゼウスの神は希臘の新しい神代の始祖であると同じく、伊邪那伎命も亦神代七代の最も終りの神で日本の神々の始祖である。

二　地理研究

希臘の世界始原神話の地理は勿論今の希臘ではなく、神話の比較研究に次いで詳細に其地理を研究すると、西は西部亞細亞――アルメニヤ、バビロニヤ、亞拉比亞羽太、埃及、阿弗利加北岸一帶を含み、東は波斯から印度河に至るまでの間である。

ウラノスとガヤとの地――は未だ明確にして居らぬが、意ふに專ら中央から北部

亞細亞で、ウラノスの名はウラル山に存して居り、其れから東部一帶がガヤの地と考へられる。スカンヂナヴヤの「エッダ」經に據つても其考へが付く。そしてガヤ女神は「エッダ」の所謂巨人卽ち「ガヤ生れ」なる者の母であり、又其巨人の地は西伯利方面のやうである。

チタン十二神の地——は西部亞細亞から西に向つて阿弗利加の西偏までに亙つて居る。(一)オーキアノス卽ち神々の大祖たる「翁」の地は印度河の西部で、其地のパラバニソス卽ち「バン」(翁)の名を負うた山がある。謠曲「翁」の地も其れである。(二)其妻テーツスは其西北のバルツヤに對譯される。(三)ヒペリオーンは若き太陽を意味しアスリヤである。(四)テヤは美觀を意味し猶太である。(五)コイオスは猶太の南方イドムである。(六)フォイベーは日の最も長じたことを意味し、シナイ半島である。(七)クレイオスは觀望を意味し、埃及に當る。故に埃及及南方をヘブタノミス卽ち「七の野」と云ふてある。(八)ヤペトスは遠く延長するを意味し、埃及から西方の海岸エムポリヤである。(九)ムネモシネは又其西の

マスサエスリである。(十)テミスは正義正直を意味し、伸びることを意味するヌミヂヤである(十一)レヤは其西部海岸メタゴニタイである。(十二)クロヌシは黑主で、モロッコ卽ち蒙、晦を意味する土地である。然しレヤとクロヌシの土地は最後に移つた土地で、其本原の地は波斯とバビロニヤ(カルダヤ)とのやうである。又テミスとムネモシネとの地は又埃及南方ヌビヤ及びアビシニヤにもあるやうである。

特に**クロヌシの國**——クロヌシは黑主でカルダヤの土地である。佛典に六群の比丘なるものゝ中に迦留陀夷は色黑く性多欲としてある。且つクロヌシ(Kronos)のクロは羅典語Curo で「食ふ」卽ち大食從つて多欲を意味する。故に此の神は自分の子を呑み食ふたのである。亞拉比亞一體の別名は大食國ではないか。且つ父ウラノスの名の語幹(Uranos)は大に得ること贏ることで、鵜(得)の鳥の性質は之れであり、呑み込んだものを吐き出すことをする點に於て、クロヌシは父ウラノスの名稱の意味を承け繼いでゐる。古事記に栖八玉神が鵜となつて大國主神に仕へたと

ある土地はカルダヤのチグリス河口の古事である。支那歴史の夏の禹王も亦鵜で、土地は昔のスメル卽ち夏のウルの事であつて、同じ地名が歴史となり、神話となり、種々に傳へられて居ることが察せられる。日本の出雲の大國主系の歴史や、支那の夏の禹王の歴史などはウラノス、クロヌシの神話地理に關係を持たせて、中央亞細亞、カルダヤ、亞拉比亞等の地理で研究せねばならぬのである。

キクローブス――卽ち目一箇神の地は亞拉比亞東部オーマンの地で希臘語 Omma を語源とし、目、海、馬を意味する。日本書紀神功皇后紀にはキクローブスを聞聾大鹿、速狹騰尊と謂うてあるが、其速・狹騰はオーマンの Bakali-tai のことである。

百工神族――ヘカトンキレース百手神族の地はオーマンの西南部ハッドラマウト卽ち「百手」の地であることも明瞭である。

希臘神話にキーロン或はケンタウロスなる「馬人」と云ふ者があるが、其れは目一箇神々と百工神族を謂うたもので手工、藝術、馬術に長じ、其地名がオーマン卽ち馬の地であり、現に Umm と其地を言うて居る所から馬人の名が出たもので、其

人種も次第に東漸することは神話で察することが出來る。

佛書に須彌山の圖なるものがある。あれは亞拉比亞全部と小亞細亞との地圖を繪にしたもので、其れに四天王なるものがあるが、其持國天とは亞拉比亞北部昔のアグライであり、廣目天とは東部、今言うたオーマン卽ちキクローブスの地であり、增長天とは南部エメンであり、其東部ハッドラマウトが百工神族の土地であり、多聞天とは西北部の猶太で、チタン族のテヤ女神の國である。

オリムポスの神山とオトリス山――オリムポスは我古典に所謂高天原で、アルメニヤである。Olympos とは蓋し O-Lymphos で御乳を意味し、乳母をアマと謂ひ、天と同語で、ゼウスの神の國は其れである。クロヌシの神の國は前に謂うたカルダヤで、其地にヘグラの原があるが、ヘグラとは翼を意味し、萬葉に「大鳥のはがひの山」とあり、クロヌシ側のオトリス（Othrys）山とは、カルダヤのヘグラの事である、日本古典の新研究に據ると、カルダヤが大國主神の出雲であつて、此ゼウスの神達とクロヌシの神達との戰爭は高天原と出雲、卽ちアルメニヤとカルダヤ（バビ

ロニヤ）との戰爭を謂うたものゝやうである。今の希臘にもオリムポス山もオトリス山もあるが、其れは移寫したものに過ぎぬ。

チタン神族は出雲族サタン族――ゼウス神族とチタン神族との戰爭は高天原と出雲との戰爭のやうであることは前に謂うた。又耶蘇教の神と、サタンとの戰爭のやうでもある。が、「チタン」とは何を意味するか。チタンの綴りのTをSに變更して考へて見れば善くは無いか。然らば Sitan となる。之れは英語の Sit(an) と同語で、また Sat(an) となる。現日本の出雲の國出雲郡をシット郡と讀ますに考へると、チタン卽ちシタンはシット卽ち「出雲」族と判定するも困難でない。又 Sat からサタン族と見るも亦容易である。然らばチタン族は出雲族卽ちサタン族と斷定して誤らぬと思はれる。

プロメーテウスとエピメーテウスの地――プロメーテウスとは前メヂヤ國、エピメーテウスとは後メヂヤ國の事である。「メヂヤ」には鎖縛の意味があるからプロメーテウスは鐵鎖で縛られたのである。此國又アヤ（Aia）と云ひ、アヤは漢で支那

史の前漢と後漢のことである。其れ故にプロメーテウスの地はメヂヤ西部であり、エピメーテウスは波斯東部今のアフガニスタン、バルキスタンの土地であり、此方面に美人パンドーラ卽ち『取りよろふ天の香山』なるツフタン（Tuftan）山もある、箱の地たる昔のパクチエース（Pactyes）の地名もある。

金、銀、銅、鐵時代の地――神話は四時代を云ひ、世は次第に惡くなることを云ふて居るが、是れは單に時代の變遷のみを云ふのでなく、神話地理の中心が動いて居ることを示すのである。神話の地理は西から東に移つて居る。（一）始めはバビロニヤ方面で昔は其地をアウラニチス（Auranitis, aurum）卽ち黃金地と謂ひ、之を黃金時代と名づけ、（二）波斯西部を現名クジスタン（Khuzistan, Xyo）卽ち白色、白雪、白銀の地と云ひ、白銀時代と名付け、（三）カルダヤ（Khaldaia）は銅の地を意味し、之れを赤銅時代と名付けた。神話の中心は之れから漸次に東に向つて波斯東北と昔のスキチヤ（Skythia）今のツルキスタン（Turkestan）方面に移つた。之れは鋤の地劍の地で黑鐵の地、黑鐵時代なるものである。且つ此地方をコラズミ

(Chora-smi) と云ひ『黒住』を意味して居る。ヂヴカリオーンの洪水は此時代即ち此方面で起つたことである。

洪水の地――ヂウカリオーンはプロメーテウス即ち前メヂヤ國の子である。彼れの船が着陸した土地は印度河の西、今のバルキスタン、語源は Bal-ochistan で船着く、基礎置く等を意味し、所謂バルナッソス山とは其地のヂザクの地名に對譯せられ「船着」を意味する。此地のアナミス河の上流に昔のピュラ(Pura)の地があり、今バーラと謂ふが是れが妻ピュルラ(Pyrrha)の名を負うたものであらう。又バルキスタン東北部に昔のパクチヤの地がある。箱を意味し、箱船を意味する。バルキスタンの海岸を今も Makran と云ふが、之れは柱立てを意味し、柱立てを Oeno-colo と謂ひ、日本古典の伊邪那伎、伊邪那美夫婦の神が天降り玉うた淤能碁呂島とは此マクランの別名である。支那古典「禹貢」洪水記事の、始めて陸地が表はれた所の冀州關係の記事は、全く此バルキスタンの事を云ふたもので、禹の洪水地も此着眼地から研究を始めて來ねばならぬ。

此後アポローンが地球の中央として神社を立てたパルナッソス山も、ヂウカリオーンの船の着陸した此パルナッソス山と同じである。

石が人に化つた地――ヂウカリオーン夫婦は神託に由つて人間を增殖する爲めに『頭を蔽ひ、上衣を寛うして、石を後向きに投げたら人となつた』。此地理は地圖を見れば直ぐ明る。波斯灣の入口の北の國を昔はカルマニヤと謂ひ、今はケルマン(Karmania, Kerman)と云ふが、之れは「頭を纏ふ」を意味する。其西に隣つてファルシスタン(Farsistan 語源 Pharos)の地があつて、「着物を寛うする」ことを意味する。又其地一帶をペルシス(波斯)と謂ひ「石を投げる」を意味する。「石」の語は又「人」の意味を含んで居り、是れが人類增殖――伊邪那伎命の所謂天の益人、蒼生の地である。

此通り研究すると、洪水前――洪水地前の希臘神話は中はアルメニヤ、亞拉比亞、西は亞弗利加北岸の西極、東は印度河、北は中央亞細亞に擴まる地理に關したものである。決して今の歐羅巴の小さい希臘では無い。

第三章　ゼウスとヘーラ女神

オリムピヤ――希臘神話の大きな神々をオリムピヤの神々と謂ふ。オリンポスの神山に住んで居給ふ故である。此山には雲の門があつて天地を相交通せしめ『時』の女神と『節』の女神とが之れを守衛して居る。神々は各其居所があるが召集せられる時は、各方面からゼウスの神殿に集り、常には地上に、海に、又地の下に住んで居る神々も、此時には來會してオリムポスの神殿の大廣間で日々ネクタルと云ふ神の酒や、アムブロシヤと云ふ神の食物の饗宴を開き、こゝに天地間の事件を語り合ひ、若い美しいヘーベ女神はネクタルと云ふ神酒を御酌し、アポローンの神は琴を彈き、ミューズの神々は聖歌を歌ひ、日が晩れると神々は夜の宮居に歸り玉ふのである。

元來此オリムポス山は、前に述べた如く始めは波斯方面に在つたが、其の後印度

方面にも移り（人種移動に由つて地名をも寫す）、後又希臘人種の西遷に由つて北希臘のテッサリヤ北部の山をオリムポスの山と云ふやうになつたのである。其れ故にこゝにオリムポスの山と云ふても、讀者は常に其本地と垂跡との地理を念頭に存して置くことを要する。

此オリムピヤはチタン族とゼウス族との關係の時代には、前にも言ふた如く波斯（或はメヂヤ、アルメニヤ）に在つたものであるが、ゼウスの神代になつてからは專ら印度の緬甸に移つたオリムピヤのやうである。思ふに其民族が東方に移動したと共に神話地方も新に寫されたのであらう。今の歐羅巴の希臘のオリムポス山もオトリス山も亦西の方へ殖民した者が本原的オリムポス其他の地名を寫したものに過ぎぬが、希臘神話の地理的舞臺は今の希臘の土地には何等の緣はなく、吾々は東洋地理を舞臺として希臘神話を讀まねばならぬのである。

オリムピヤの十二神――オリムピヤに十二柱の重要の神々がある。

（一）ゼウス――一名ユピテル。天界第一の神。日本の伊邪那伎神に當る。

(二)アテイナ女神――一名ミネルヴ。ゼウスの額から生れた娘。天の位の繼承者。
我天照大御神に當る。
(三)ヘーラ女神――一名ユノ。ゼウスの妹、又妻。伊邪那美神に當る。
(四)アレース――一名マース。ゼウスとヘーラ女神との子。軍神。荒神。
(五)ヘーファイストス――一名ヴルカン。ゼウスとヘーラ女神との子。鍛冶の神
天津麻宇羅に當る。
(六)ポセイドーン――一名ネプツヌス。大海神。
(七)アポローン――一名フォイボス。ゼウスとレートーとの間の子。清淨、豫言、
弓矢の神。事代主神に當る。
(八)アルテミス女神――一名ヂアナ。アポローンの妹。處女、半月の女神。多
祁理姫命に當る。
(九)アフロヂテ女神――一名ヴヌス。美と戀との女神。淡島女神、又田寸津姫
命に當る。

(十)ヘルメース――一名マーキュリー。ゼウスとマイヤとの間の子。道の神、使
の神。國常立の神ともなり、又鹽土の翁とも現はれて居る。
(十一)ヘスチヤ女神――一名ヴスタ。ゼウスの姉、家庭、竈の神。
(十二)デーメーテール女神――一名ケレース。ゼウスの姉。大母、土地の女神。
我大宜都姫命。其娘プロセルピナは豐受姫に當る。
此他にオリムピヤ十二神の中ではないが重要な神々は――
ブルトーン――一名ハイデース。黄泉神。
ヘリオス――日光の神。
ヂオニソス――一名バッカス。酒の神。
カリテース――優美の女神達。
ミューズ女神――藝術の神々。
ネーレイド仙女
ニンフ仙女　山や森や海や川に住む仙女達である。

ゼウスの成育

――ゼウスの生れ玉ふた場所に關しては、諸說紛々、何等明瞭な地名の定まつたものなく、希臘本部にも其場所があると謂ひ、又クレタ島にも其地があると謂ふけれども亦何等の證據もない。又神話全體――殊に世界的比較研究から謂ふ時は、一層不明瞭の事である。かのゼウスの母レアの神が夜密にクレタに來て其地の巖窟にゼウスを隱したとの其クレタは、今の所謂、地中海のクレタ

ゼウス神像

島ではなく、實は波斯西部の地であるに於ては、一切の舊說は盡く否定せられねばならぬ。

ゼウスはクレタ（暮の地）に於て山羊アマルテヤの乳を飲み、其山の蜜蜂は蜜を與へ、神聖な鳩は其隙にネクタルの神酒と、アムブロシヤの神食とを持つて來て此神を育てた。且つ保育者たるクレテース等は一切の害物から此神を保護し、軍の舞樂に由つてゼウスの啼聲を隱したとのことである。

宇宙の三分統治――ゼウスの生誕や、成育やチタン神族との戰爭の事は前に之を述べた。かのクロヌシの神が一度呑み込んだ神々を、ゼウスはクロヌシの神に再び之れを吐き出さしめたから、自然有功者としてゼウスは自ら神々の中の第一番の者と爲られたが、世界は其統治上兄弟三人の間に三分せられて、ゼウスは天と地の上とを支配し、ポセイドーンは海を掌り、プルトーは地下幽冥界を支配することとなり、こゝに宇宙の三分神政は行はれることになつた。此世界三分統地は日本神話の天照大御神（伊邪那伎命の後繼者）は天と地上とを治らしめし、須佐之男命は海原を治

ろしめし、月讀命は夜の食國卽ち幽冥界を治ろしめしたと同じである。されどゼウスは最も尊い神で假令天の神ではあるとも、其黃金の鎖を以て陸も海も之を繫ぎ、ポセイドーンもプルトーンも其大權の下に服屬せしめて宇宙全體を統治し玉ふことは、吾天照大御神が、神々の中で最も貴いと同じである。

ゼウスの神性——ゼウスとは何を意味する名であるか。Zeus の語源は Ze, Zan, Zeio 等であつて生命、新鮮な者、若者、生產する者、力强いものを意味して大陽氣の者である。羅馬のユピテルも亦同じで Eu-phyter を語源とし、日本の伊邪那伎も Izanage で同じ意味の神名である。又 Zan は羅典語 Jana で、之れが英語の Zun となり太陽を意味して居る。さらばゼウスの性質は皆是等の意味から出て居ることが知れるのである。

太陽は天のものである。此に於てゼウスは天に關する一切現象を支配する神として、雨の神であり有力な雷霆の神である。霹靂の神であり又暴風の神である。其暴風の神であり、雷霆、霹靂の神であると同じ性質を以て、ゼウスは戰爭の神であり、

尙武の女神アテイナや、軍の神アレースの父である。ゼウスの甲をアイギスと謂ひ山羊を意味し、角を意味し、雲を意味し、雷霆や電の箭を象つたもので、其强烈な勢ひには天下何物も敵することが出來ぬ武器である。ゼウスは後に之をアテイナ女神に讓り玉ふた。

太陽が萬物を照らす如く、ゼウスも又天の上から一切萬物を視玉ふ神である所から、之をオムマ卽ち目の神と謂ひ、又アドラストスと謂ひ、天眼通の神と謂ふ。クレタでは星燦然ときらめく天の神アステリオスと稱し、又太陽の神としてタライオスと云ふて居る。又高い天の神であるが故に山の嶺や樹の梢などはゼウスの居所である。天の高く澄んで居る如く、ゼウスは其崇拜者の凡ての事物も身體も心も清淨であることを要求し玉ふのである。正義は此神のものである。故に此神は家族に關し、親族に關し、國家に關する義務を監視し玉ふのである。特に國家は此神の守護し玉ふ所で、國家第一の神壇は王宮中にある。さればアテイナイ市の最も高い神聖な邱にはゼウスは國家守護の神として祭られ、國家の聯盟には又『全ヘラス』の神

として崇敬せられて居る。ゼウスは一族の神である。婚姻及び子孫繁榮の神である。正義の女神ヂケーはゼウスの側に在つて、宣誓の神であり、境界の神である。ゼウスには又豫言の性能が有つて、ドードーナは希臘に於ける此神の神託地の最も古いものでアポローンのデルフォイよりも尙ほ古い。亞弗利加のリビヤ砂漠にあるアムモンのゼウスの神社も亦有名なるものである。其神託は、神社の境内にある槲の樹の葉が風に吹かれる音で知れるので、祭司が之れを人間に通辯する。

ゼウスは此通りに一方には正義嚴格の神であるが、其他の半面は全く之れと異うて其高い天から『黃金の鎖を以て地と海とを繫ぎ』一切のものを統治して雲を集め、雪を作り、雨を降らし、光と熱とを適度にし、時節を整へる神である。其れ故にゼウスは又農業の神として崇敬せられ、人々は收穫や果實を奉獻て天候の不良なことや暴風や惡寒等のないことを祈るのである。

體力や勇氣は此神の愛する所である。されば體育、運動などは此神の最も保護する所で、從つて又軍事の神である。體育競爭の優勝者はゼウスの橄欖樹の冠の褒

美を受けることになつて居るが、是等の神性は此神の子なるアポローンや、ヘルメースや、ヘーラクレースなどに明瞭に表はれて居る。正義の神は又弱者を憐む者である。弱者、旅行者、哀願者はゼウスは之を保護し、其哀願を容れる神性をゼウス・アライオスと名付ける。ゼウスは又友愛の神として崇拜せらる。此の通り人生全般の事はゼウスは盡く關係を有つて居て、其他の神々は、殆んど此神の各方面の性質の發現したものと云ふても可い。

バウキスとフィレイモン——ゼウスは天界第一の神であり雷霆の神ではあるが、又た人間の幸福を思ふ神である。或時人情視察の爲に、其子ヘルメースを連れて貧しい見すぼらしい旅人の姿に扮して或村へ行つて宿を求め玉ふた。所が其村の者は甚だ不人情で一軒として宿を借す者が無い。遂に或る草葺きの小さな家に來玉うたら、其處にフィレイモンとバウキスと云ふ年老た夫婦の者があつて此二人の旅人に宿を借し、貧乏ながらも出來る丈けの待遇をして座布團を布くやら、火を起すやら、手足を洗ふ爲めに盥に水を汲むやらして、其れから暫時の間四方八方の話をして、

次に足の一本短い食卓にすけ物を當てゝ平にし、其上を綺麗に拭き、粗末ながら心をこめた食物を土器や木椀に盛つて出し、酒も付け食後の果物として林檎なども添へて出した。食事の進みつゝ有る中に老人夫婦の驚いた事は、汲んで仕舞ふた酒壺に自然と酒が充ちて居る事で、夫婦は始めて是等の旅人は只人ではなく神である事に氣付き、膝まづいて手を合せて禮拜し、貧しい待遇のお詫を爲し、年比此家の主として飼うて居る年取つた鵞鳥があるのを思ひ出して、之れを神々へ供物にしやうとした。然し此鵞鳥は逃げ廻つて老人夫婦の手に合はず、遂にゼウスとヘルメースとの足の下に逃げ込んだ。其處で二人の神は鵞鳥を殺すことを制めて言ひ玉ふに『我我は神である、此不親切な村には其罪は報はれる。汝等二人ばかりは罪が無い。汝の家を出て我等と共に彼方に見える山の頂に從て來い』と、老人夫婦は家を出て山を登りつゝ後を見ると、自分の村は見て居る内に水が來て湖水になつたが、只だ自分の家ばかりは其まゝになつて居る。尙驚いたのは今まで草葺であつた自分の小家のほつ立ては、礎が出來て立派な柱が建ち、黄金の屋根、大理石の床となり門や扉は黄金もて見事に彫刻された家となつた事である。其處でゼウスの言はれるには『親切な奇特な老人夫婦よ、何なりと汝等の願ひ事を語れ』と夫婦は暫く小聲で相談して居たが極めて謙遜に『吾等夫婦の者は此神殿の祭司となり、死ぬる時は夫婦同時に死ぬることが願はしい』と申し上げた。此願は聽き屆けられた。老人夫婦は其後長く此神社に仕へて居たが、一日神社の前に立つて此場所の昔話をして居る中、バウキスは夫フィレイモンの身から木の枝が生え葉がさして來るのを見た。フィレイモンは又たバウキスも同樣になつて來たのを見て、其終りの時の來たことを知り、互に別れの言葉を交はしつゝある間に、木の葉の冠は彼等の頭の上に茂り、二人は互に『さらばよ婆さん』、『さらばよ爺さん』と言ふと同時に木の皮が出來て二人の口を蔽ふた。爺の名フィレイモンとは語源 Phyll-eimon 木の葉衣を意味し、婆の名バウギスとは Bark 樹の皮を意味するのである。チアネヤ (Tyanea 語源 Ayn-anea 姉波、相生) の牧童は今も其二つの木が有ると言ふて居るとのこと。——日本の高砂の尉と姥と、又た姉波の松のやうである。

ゼウスの戀愛關係——世界萬人の父となるべきゼウスの神は其名の示すが如く生生的でなければならぬ。從つて戀愛關係は無數である可き筈である。形を成した希臘神話ではゼウスの妹ヘーラ女神は正妻となつては居るが、始めからさうでは無かつた。ゼウスは記憶の女神ムネモスネと結婚してはミューズ女神等の父となり、正義法則の女神テミスと結婚しては四季の女神ホーライ(蓬萊)の神々を生み、廣大なる法則を意味する女神ヨウルノメと結婚しては其間に歡喜、優美の女神カリテースがある。正義と監視との女神ネメシスと結婚しては一種不思議の卵子が生れて、其卵子から非常な傾國の美人——ツロイの大戰爭を引き起したヘレンなるものが生れた。始めゼウスがネメシス女神を戀ひ慕ふた時には、女神は山に海に遁げ隱れたが、ゼウスは遂に自ら白鳥に化つて此女神に接近し、其戀を遂げた。其結果が不思議な卵子で、其れから非常の美人が生れたのである。ゼウスはレートー嫒と結婚してアポローンの神と其妹アルテミス女神とを生み、デーメーテール女神と結婚してプロセルピナ一名ペルセフォネー女神を生み、クルレネ山ではマイヤ女神と結婚

してヘルメースを生み、ドードーナではヂオネ女神の夫の神として尊崇せられて居る。神話上ヘーラ女神が此神の正妻となることになつたのは是から後の事である。此他種々の地方で種々の女神はゼウスの妻であると謂はれて居る。且つ人間の女子でゼウスの妻となり、其子は神と成つたものも少くない。例へばカヅモスの娘たるセーメレ嫒はヂオニソスの母となり、チバ國の皇后アルクメネはヘーラクレースの母となり、又た同じくチバのパンチオペ嫒はアンチオーンとゼートスとを生み、イヨ嫒はゼウスに愛せられてダナウス族及びアイギプトス族の祖母となつて尊敬せられ、其女ダナエ嫒は再びゼウスに愛せられて英雄ペルセウスを生んだ。此他仙女アイギナやカリストなども亦ゼウスに愛せられたのである。

イヨ嫒——ゼウスに愛せられたイヨ(伊豫)姫は大洋の子たるイナコスなる河の神の娘である。一日ヘーラ女神は一天俄にかき曇るを見て、之れは必ず夫ゼウスが何か秘密を隱蔽する爲のものと推察して、其曇りを拂ひ去つて見ると、或河の堤にゼウスの神が美しい牝牛の側に立つて居玉ふのを見、尙ほ善く見ると牝牛の形は或美

しい人間の形の仙女を隠して居るのが認められた。此仙女はイヨ媛であるが、ゼウスはヘーラ女神の近づいて來た事を知つて俄に仙女を牝牛の形に變へ玉ふたのである。

ヘーラ女神は其牝牛の美しさを讃め、此牛を自分に呉れよと求め玉ふた。ゼウスは自分の情婦を妻に渡すは甚だ不本意では有るが、又た紛爭の本となるのを厭ふて承諾し玉ふた。するとヘーラ女神は此牝牛をアルゴスなるものに渡して嚴重に監視をさせ玉ふた。

アルゴスは百の眼を有つて居る者で、眠る時には二つの目丈で眠つて、其他の目は起きて居るから、イヨ媛の監視には最も適當なのである。且つアルゴスは伎になると牝牛の頸に繩を掛けて縛つて居た。イヨ媛の牝牛はアルゴスに自由を求めたけれども意が通ぜぬ。父が來たに由つて砂の上に蹄で簡單に自分の名を書いてイヨであることを知らしたに由つて、大に歎いて居たがアルゴスは之を見付けて牝牛を牽て行つて、自分は高い堤の上に坐り四方を見つめて番をして居た。

ゼウスの神は自分の情婦が苦しんで居るのをいたく悲しんで、アルゴスを殺す爲めにヘルメースの神を使はし玉ふた。ヘルメースは睡眠の棒を携へ、又シリンクスの簫の笛を吹きつゝ徐々に歩んで行つた。アルゴスは簫の音を喜んで言ふた『若い衆。我が側に來て石の上に腰をかけ玉へ、此には善い樹の蔭もある』と。ヘルメースはアルゴスの側に腰をかけ、笛を吹いたり色々の話をしたりして、扨て簫の笛の來歴を語つて云ふに『昔或所にシリンクスと云ふ仙女が有つたが、森や林のサツリ等から戀をせられたが、此女は男嫌ひで、只處女の神アルテミス女神に仕へるのを心として居た。或時サツリが此女に出會ふて、有らゆる言葉を盡して女の美をほめ立てゝ口説いたが、女は其れを耳にもせず走つて遁げた。男は女を追うて河の側まで來て女を捕へようとしたから、女は其友達の川の仙女を呼び出して援ひを求めたら、仙女等は其願ひを聽いた。男は追ひ付いてシリンクスの姿を抱き留めたと思ふたら其處らに立つて居る葦の穂を抱いて居たので、男が溜め息をしたら其息が葦に響いて哀れな音調を出した。其音調の美しいのを喜んで森の神は『おん身は我がも

ゼウス神像

のぢや』と言ひ、其れから葦の竹の長いのを取り集めて之を並べて簫の笛を作り、仙女の名を紀念して之をシリンクスと名付けた』と。ヘルメースが此話を終る前にアルゴスは氣持善く睡つて仕舞ひ凡ての目が閉ぢて居た。其處でヘルメースは直ぐアルゴスを殺し、イヨ媛を自由に解放した。ヘーラ女神は此アルゴスの目を取つて自分の孔雀の尾の模樣にして、今日までも其通りになつて居る。(アルゴスは佛教に所謂孔雀明王の事である)。

ヘーラ女神は未だ之れで滿足せずイヨ媛を苦しめる爲めに虻を送つた。イヨ媛は虻に刺される苦しみを遁れる爲めに海を渡つたから、其海をイヨの海と名付けた。イヨ媛の牛は此後諸方を遍歴して遂にナイル河の堤に着いた。ゼウスの神は此後イヨ媛に關係せぬとの約束で、ヘーラ女神はイヨ媛の牛の姿を以前の女の姿に直し、媛は埃及王の妃となつて幸福の一生を送つた。

ヨウロッパ媛——は海神の子のポイニシヤ王たるアゲノールの娘で、又イヨ媛の數代の後裔である。或時媛は友達と海岸の牧場で摘草をして遊んで居たが、ゼウスの神

は彼女を見て戀に陷り牛の姿になつてヨウロッパ媛に近づき玉ふた。牛は極めて溫順であつたから媛は少しも之を恐れず、牛を撫でたり之に接吻したりなどして居た。さうすると牛は乘れと言はぬばかりに彼女の足下に屈んだ。媛は友達を呼んで、此牛の溫柔いのをほめ、牛に乘つて遊ばうではないかと自分は先づ牛に乘つた。媛が乘るが早いか牛は直ぐ起き上つて急いで渚の方へ行き波の上を駈け出した。牛が來ると共に波は靜かになつた。ヨウロッパ媛は驚いて友達を呼んだが、どうにも爲やうがない。牛は益々海上遠く出た。海の怪物も、入鹿もネレイド等も周圍に波の上に出たり、入つたりして樂しげに戯れ遊んで居る。媛は今はあきらめて牛に向つて、汝は何者ぞ、又何處へ自分を連れて行く積りかを問ふと、牛は答へて『恐れる事は無い。吾はゼウスの神で、おん身を戀して假に牛の形に化つて居るのである。クレタは我乳母の國であるから其處へ行つておん身と結婚するのである』と云ふた。

ゼウスとヨウロッパ媛との間に三人の子が出來た。ミノースはクレタ王となり其死後は地獄の裁判官となつた。次はラダマントスで又死後地獄の裁判官となつた。

第三はサルペードーンでリキヤの祖先となつた。此に所謂クレタとは日本語「暮れの地」即ち「黄昏」の地を意味し、ヨウロッパとは夜目を意味し、「源氏物語」には夕顔となつて居る。此女性の行衛を探して兄弟カヅモスがチバへ行き、チバ家を創めることは後にチバ家の神話に説く。

アイギナ嫁――アソーポスなる河の神にアイギナなる仙女があつた。ゼウスの神は此女を愛して、鷲の姿に化つて女をアイギナの島に誘拐し玉ふた。コリントス王シ、ホスが此計略を知つて其秘密を暴露したからゼウスはシ、ホスを地獄に投げ入れ玉ふた。所が一方にはヘーラ女神は又々嫉妬を起してアイギナ全島を難やまし、激烈な疾病を送つて殆んど全島の人民も動物も草も木も之を滅ぼし玉ふやうになつた。時に其島の王はアイヤコスと云ふ親切正直な人物で、非常に心配して、ゼウスの祭壇の前に立つて『あゝゼウスの神よ、眞爾は我父に坐しまさば、願はくば吾人民を回復して元のやうに爲し玉へ。若しさうで無いならば我身も亦他の人々のやうに其生命を取り去り玉へ』と禱つた。神は此禱を聽くとの知らせがあつた。暫くすると其立つて居た場所にゼウスに神聖な槲の樹が生えて枝葉が青々と茂り、蟻が無數に集まつて其勞働にいそしんで居た。アイヤコスは之を見て又神に向つて此蟻の多いやうに吾國の人民を殖やし玉へと禱つた。夜になつてアイヤコスは寢て夢を見た。其夢には、同じく槲の木が立つて居て茂つて居る枝には無數の動物が居り、やがて其れが枝から落ちて成長し直立して人間の形になつた。アイヤコスは目が醒めると表に人の聲が喧しく聽える、尚ほ夢中と思ふて居ると其子のテラモーンが來て神社の戸を開いて聲高に呼んで云ふに『父上あれ見玉へ、蟻み玉ふよりも優つたことが有る』と。アイヤコスは表に出て見ると夢に見たやふに無數の人々は群集して居たので非常に喜んだ。すると人々は近寄つて來て膝まづいてアイヤコスを祝し、彼れを王と仰いだ。アイヤコスはゼウスに感謝し、彼等をミルミドーンと名付けた。之れは『蟻の名』を意味する名である。此民族は蟻のやうに勤勉で盛んに儲けることを爲し、儲けることにかけては非常に熱心である。旱魃の時はアイヤコスは何時でもゼウスの神に祈ると、必要な雨は必ず降るのであつた。ツロイ戰爭の時希臘軍の勇

將で、アイヤコスの孫のアキレウスの率ゐた兵士は此ミルミドーン人であつた。

アンチオペ媛――も亦アソーポスの河の神の娘で、アイギナの妹である。始め『マイナット』（歌垣）の舞踊會の時にゼウスは樹木の神サッリの姿になつてアンチオペを呼ばい、アムフィオーンとゼートスとの二人の子が出來たけれども、母は種々都合惡く、之をキタイローンの山に棄てたが、子供は牧羊者に助けられて成長して兩親は誰であるかは知らなかつた。其後種々の事變があつてアンチオペはチバ國の僧王たる其伯父リコスの手に落ち、伯父の妻ヂルケの指圖で非常に虐待せられた。アンチオペは或暴風の夜にチバを拔け出しキタイローンの山で前に棄てた二人の子に出會ふた。其時宛もキタイローンの山でヂオニソスの祭禮があつて、伯母ヂルケも來合せてアンチオペに會ふた。伯母は此處ぞ善い時と、牧羊者等に指圖してアンチオペを野牛に縛り付けて踏み殺さすやうにした。宛此時年取つた牧羊者にアンチオペ母子の事を知つて居る者が有つて、こゝに母子の名乘りをさした。二人の子はアンチオペを解いて其代りにヂルケの髮の毛を牛に縛り付けて踏み殺さした。ヂル

ケは死んだ後にチバに水を注ぐ所の荒い川になつたとのことである。其後アムフィオーンもゼートスもチバの王となつた。

アムフィオーンは琴の名人で、其リラ琴を彈く時は地に在る石も自然に動いて築きつゝある所のチバの城の壁を作り、草も木も皆其妙音に感動したとのことである。然し此音樂者の一生も其妻ニオベの傲慢の爲めに滅びることになつた。是れはアポローンの神話の中に說いてある。

弟ゼートスの妻の名はアエイドーン（夕告鳥）と云ふが誤つて其子イチロスを殺し、ゼートスは其不幸を悲しんで死に、アエイドーンは鶯に化つた。

セーメレ媛とゼウスとの關係はヂオニソス傳の中に、カリスト媛との關係は天象地文に關係する神話の中に、アルクメネ媛との關係はヘーラクレース傳の中に述べる。

羅馬のユピテル――希臘神話のゼウスは羅馬ではユピテルと謂ふて居る。其神性は同じであつて、其初め天神であり、祖先の神であることもゼウスと同じである。

此神の光明性をルケイオスと謂ひ、雨を降らす神性をエリキウスと謂ひ、又葡萄の栽培の神として尊敬せられて居る。其電霆の性質をユピテル・フルグスと謂ひ、電霆に撃たれる者は神の手に觸たるものとして、凡て之れを神聖として居る。

ユピテルは又戰爭の神で、敵を打撃する神性をエレトリウスと謂ひ、捷利を與へる神性をポクトルと謂ひ、契約締盟の神性をフィヅスと謂ひ、又其大王性をユピテル・オプチムスと謂ひ、戰爭に凱旋する時は、大將は隊列を整へてゼウスの神社に參詣し、其鹵獲品を奉納する。此通りであるからユピテルはローマの統一を代表する神である。

美術上のゼウス——美術では、ゼウスは普通に筋骨十分に發育し、豊かな毛髪濃い鬚髯が有る壯年の人物として表はされる。身體は上半部は裸體で下半部は寛博とした裳の樣なものを纏ひ、頭には時に橄欖樹の冠を戴き、右の手に笏或は杖を持ち、左の手を伸ばして、其掌には勝利の記號たるニケの像を持たせてある。時には其手に電の箭を握らせてあることもある。ゼウス像の傍には鷲が据ゑてある。

又鷲の冠に梅の花を載せてあることがある。是は梅の語原はOmma即ち「目」で、生々の春を意味すると同時に全視の神を意味するのである。

ヘーラ女神像

ヘーラ女神——ゼウスの正妻をヘーラと謂ふが、ヘーラとはヒエラ（Hiera）の轉訛したもので神聖、大、高、鷹、鷲、鳳等を意味する語である。其れ故にゼウスの側には鷲がある。ヘーラ女神はクロヌシとレヤとの間の女で、ゼウスの姉妹であるが、一夜他の神々の寢つて居る時、竊に、蜜の流れる花園で、星のきらめいて居る蒼天を天蓋として、芝生の上で結婚し玉ふ

ヘーラ女神像

た。地は其結婚を祝して、夕日まばゆき黄金の色に實を結べる林檎の樹を生ぜしめた。是れは生命の樹である。

ヘーラ女神は凡ての女神中の最も女王に相應はしい威儀ある女神で、其目は牛のそれの如く、黄金の草鞋を穿き、黄金の玉坐に座し、其光榮は比ぶべきものがない。其出て玉ふ時は黄金を以て馬を裝ひ、黄金の車に乘り、其威儀其美形容の言葉がない。そして其威儀たるや美であるけれども畏るべきものがある。

其ゼウスの妻たるが故に、ヘーラ女神は、又天の女神であり、雷霆は又此女神の命令の下に在つて有力な武器である。女神の性質は甚だ專制で、又其嫉妬は激烈である。されば生々多情の夫ゼウスとの關係は不斷の紛爭であつて、復讐心甚だ強く、時には、欺瞞などの事もあつて、『口や言葉で扱へぬ女である』とゼウスの言はれた事もある。時にゼウスの神は怒つて女神を撲り飛ばし玉ふた事もある。又時には、女神の足に鐵砧を縛り付けて女神の腕を握つて高く雲の上まで振り廻し玉ふたこともあつた(提婆が吉祥女にした事と同じ)。其夫婦の爭の有樣は丁度天の暴風のや

うで、時にはゼウスの強い力が勝を制するとあり、時にはヘーラ女神の巧な智慧が優ることもある。此通りであるからヘーラ女神が戰爭の響きを喜び玉ふことはゼウスにも優り、希臘の種々の地方では、戰爭の遊戯は此女神の祭禮に行はれる。されば此女神を崇敬する資格のある者は、全く武人のみと謂ふても善い程である。其れも其筈女神は戰爭の神アレースの母であるではないか。

始めゼウスの神が此女神を戀し玉ふた時は、杜鵑の姿で近づき玉ふたから、杜鵑は此女神に神聖である。孔雀も牝牛も亦此女神に神聖である。

ヘーラ女神はゼウスの妻として人間の結婚を司る神である。結婚を完全にする神性をヘーラ・テリオと云ひ、新婦は結婚前に之を敬禮する。妻の貞操、母たるの義務、母としての美等は特に此女神の旨とし玉ふ所である。

ヘーラ女神の響物——以前にヘーラ女神に仕へて居たクヂッペ（灌牛）と云ふ老女があつた。此度新にヘーラ女神の像がアルゴスに出來たとの事で其れを見度いと思ふて居た。老女にビトンと（畜牛）、クレオビス（牛を顯はす）と云ふ二人の子が有つ

て、極めて孝行者である所から老母を車に乘せて、ちやうど牛が居なかつたから自分等二人が牛の代りに其身を軛に縛り付けて車を牽て夏の炎天汗を流し塵やほこりにまみれて、長い途を厭はずアルゴスの神社に行き着いた。神社に參詣して居る群衆の人々は此信神な老母や親孝行の子等を非常に歡迎優待した。其宮の祭司は、かの老女は非常に信神深い者だから、祭司の取りなしに依らずとも老女自ら直接に神に祈れと勸めたに由つて、老母は自ら女神に近づいて女神の威德を頌へ、自分の子等の孝行をほめ、牛に代つて遙々と自分を此處まで車に乘せて牽いて來て呉れた事などを語り、此信神と孝行とにめでて、願はくば女神の最も善しと見そなはす賚物を與へ玉へと祈つた。すると女神の像の眼は輝き、雷は鳴り始め、雲からは雨が降つて來て、群衆のものは靜まりかへつた。母は二人の子を探すと二人共心地よく眠つたやうな笑顏をして死んで居たのである。

羅馬のユノ女神(ジューノ)——ヘーラ女神は羅馬ではユノと傳へられて居る。Juno の語源は Inno(矢野)で矢竹を意味し、之を希臘語にすると Selloine であり、又 Selule,

となる語で、是れから學校の Schule, School (聚樂) 等の語が出る。ヘーラ女神に柘榴卽ち子育や敎育の記號があるは此理由であらう。ユノ女神の神性は希臘のヘーラ女神と略同じであるが、ヘーラ女神の激烈な性質はユノ女神にあつては非常に和いで大分女性的になつて居り、月や女性と關係深く、結婚や家庭の和親に重きを爲し、特に女性保護の代表者とあがめられて居る。

希臘神話の女神誤解——權威の盛んな女神に嫉妬のあるは勿論ではあるが、希臘神話のヘーラ女神の嫉妬は餘りに惡たらしく表はされて居る。思ふに是れは女神が敎育の神であり、正直な矢竹の神である所から、物の矯正の點を誤解して傳られたものゝやうである。比較研究上女神は日本の秋の女神立田姫の(Datuta 敎育、育成)の神で此の女神も又敎育の神である。此の神を人間に作り直した小說は太閤秀吉の正妻おねゝ殿で、此の女性の貞淑、溫良、高潔しかも立派な敎育思想は、加藤清正を敎訓する言語態度の立派さで知ることが出來る。ヘーラ女神がヘーラクレースを虐待迫害したやうに傳へてあるのは(ヘーラクレースの部を見よ)、實は女神が

大英雄の資質ある者に、有らゆる難難辛苦を與へて之れを玉成しようとし玉ふたのを誤解してヘーラクレースを惡んでいやめたものと傳へたことと考へられるのである。

美術上のヘーラ女神——は或は新婦として或は成年の女王として表されて居る。頭には寶冠を戴き着物は最も美しく裝飾を施し、時には結婚の時のベイルをかつがしめることもある。右の手に杜鵑を飾つた杖を持たせ左の手に柘榴を持たせてある。石榴は Zagreus 卽ち子育て或は教育を意味して此の女神が教育を司どることを示してある。女神の名ヘーラは語源 Hiera で、聖、大、高、鷹、又かしづき仕へることを意味して居る。

ゼウスとヘーラ女神の地理——ゼウスとチタン族との戰爭時代は、神話地理は波斯バビロニヤ方面であつたが、亞弗加利にも其土地が出來、其後次第に東漸して、其中心は印度になつて居る。蓋し之れは民族の東漸を示すものである。支那歷史でも周は始め波斯方面であつたが後緬甸に移つて東周となり、日本歷史でも神武東征

なるものは西の方から緬甸に落ち付いて居る。之れと同くゼウス神代になつてからは、地理は洪水地を越えて東に移り印度となつて、其生々的神性は專ら馬來半島の根の土地、昔のサバ(娑婆、狹穗、西王母)の地であつて、セーメレ媛チオネ女神との關係地も其邊と考證される。テミス女神、ダナエ媛、アイギナ媛關係は恆河河口の西の地。マイヤ女神は中印度東岸。デーメーテールはマヅラ、錫蘭島と恆河の口の地。カリスト媛は南印度の地。イヨ媛、ヨウロッパ媛、アンチオペ媛等の關係地はベンガル一帶から恆河流域中央印度の昔のウキシントス(牛の地)に關係して居る。ゼウスと牛との緣あることが研究の手引になる。此に所謂チバ族のボエオーチヤとは中印度の今のボウバル(「牛の行くまゝ」)と思はれる。(然しチバは此の他にもある)キタイローンの山とは其南のビンヂヤ山と考へられる。正妻ヘーラ卽ち鷹の地は北印度の恆河流域昔の笈多國に其名が殘つて居る。グプタ(Gupta)とは希臘語鷹を意味する Gupsa の變化である。他の神々の眠つてゐる時にゼウスと女神との結婚したとは中印度マハー・ナヂ。バウキスとフィレイモンとの地は恆河口附近の地。

第四章　ゼウスとヘーラ女神とに從屬する神々

ゼウスの神とヘーラ女神とには從屬する神々が數多ある。――ムネモスネ女神とミューズの神々、テミス女神とホーライ女神、ヨウルノメ女神と優美女神、運命女神、イリス女神、ヘーベ女神、美少年ガニメーデース等で、專ら生産や、文明や、美や秩序の神々である。

ムネモスネ女神とミューズの神々――人生の善と美とを保存し、文明を作り――後代記憶と發達とを表はす所の神にムネモスネ女神がある。ムネモスネ女神は後代には專ら記憶再生の女神として居るが、實は萬物の産靈である。此女神は希臘神話では、始はチタン族の神であつたが、ゼウス族とチタン族との戰爭以來又ゼウスの妃としてミューズ女神の母たる神となつた。

ミューズ（ムーザ）女神はゼウスとムネモシネ女神との間の娘で、神が人間を慰め

るために、人間に與へ玉うたもので、學問や、文藝や、美術や、其他又農業や雄辯等の靈として、非常に尊貴い神々となつて居る。始めは、ミューズは其數に極つたものが無かつたが、次第に極つた形を取つて、九柱のミューズとなつた。今之れを表にすれば左の通りである。

ミューズの名稱	性質	範圍	形態
(一)クリオー	顯章、美言	史詩、歷史	卷物を持つ
(二)カンリオペ	美聲	喜劇	札と棒を持つ
(三)エラトー	美音、美聲	戀愛歌	薄き衣。小リラ琴を持つ
(四)ヨウテルペ	愛らしさ、生々滿足、愛嬌	笛と音樂	二の笛を持つ
(五)テルプシコレー	滿足、舞踏	舞曲詩	長衣。リラ琴を持つ
(六)ウラニヤ	天を旨とす	天文	球を持つ
(七)メルポメネ	嚴肅の容貌	悲劇	悲劇の面を持つ
(八)ポリヒムニヤ	讃美に富む	宗教、學術	岩上に沈思す
(九)タリヤ	生の喜悅	農業	粗い衣、杖を持つ

ミューズの性質や、司どつて居る範圍や、形態などは右の通りである。是等ミューズは皆年若い少女を以て表はし、其黑髮は黃金の環を冠として居る。

アポローンはオリムピヤの神々の宴會や、ゼウスの祭禮には「ミューズの指導者」となるので、之れをムサゲテースと名付ける。

ミューズの宮は始めは希臘のオリムポスの北面のピエリヤの山に面する荊蕀かな斜面にあつて、此處には泉の水は流れ出でゝ、ミューズ等は歌舞のインスピレーションを得、又アポローンの子なるオルフュウスは、是等ミューズに仕へて居た。こゝに歌人等は歌を詠み、又價貴い美術を蒐集て、世界最初の博物館を作つた。博物館をミューゼウムと云ふは「ミューズに關する事物を凡て集める」を意味するのである。

（「ミューズ」の原語Museは Musaで、日本語「產靈」に當り、善美の源泉たる生產の靈を意味するのである。日本古典に「身狹」とあるは原語 Musa であり、「武藏」は其語尾變化Musaioであり、武藏の漢字發音ムゾオは同希臘語のMuseoである。）

テミス女神とホーライ（蓬萊）女神——テミス女神はチタン族の一人で、ウラノス

運命の三女神

の娘である。ゼウスは此女神を愛して、運命の女神達が大洋の源からゼウスの妻としてオリムピヤに迎へて來た始めての女神である。此女神は正義を司どり、長劍を携へてゼウスの側に坐し玉ふて居る。女神とゼウスとの間にホーライ女神がある。ホーライとは日本に所謂莽萊のことで、時を意味し、四季折々に地上の穀物果實を成熟せしめる神である。希臘神話ではホーライを三女神とし、タロー（開花）、オーコ（成長）、カルポ（實のり）と謂うて居るが、羅馬では四季に配當して居る。

ヨウルノメ女神と優美女神——ヨウルノメ女神は又ゼウスの妃で「廣大なる法則」を意味し美と歡樂とを司どり、其娘に三人の優美女神カリテースがある。一般之をグレース即ち優美と云うて居る。是

冠を戴き、歌舞音曲を司どつて、母ヨの史詩には數多のカリテースがあるが、（壯大、勝利）、ヨウフロスネ（成熟、歡又歌舞音曲の女神として崇拜せられる。の娘で運命を司どり、人間は勿論、神である。其記號として絲を以てしてあを績ぎ、光明の絲と暗黑の絲とを合はし、最も年長のアトローポスは絲の長短（神を希臘語でモイライと謂ひ羅典語で

るのは物の秩序、法則、規定等を意味し、從つて運命の意味となり、動かすことの出來ぬ宇宙人生の法則を示し、之れを神にして美觀と同時に恐れの感も伴はせてある。支那文學の屈原の「楚辭」に大司命、少司命の賦がある、此運命女神を謂ふたので

あるが、又テミス女神をゼウスの許に導いて來ることを謂ふたものと解せられる。其「大司命」の文は——

『（一）天門を廣開して紛として吾玄雲に乘る。飄風をして先驅せしめ凍雨をして塵を灑はしめん。君廻翔して以て下る。空桑を踰えて女に從ふ。紛として總々たる、九州何ぞ夭壽の予に在るや。

（二）高飛して安翔し。清氣に乘りて陰陽を御す。吾君と齊速して帝（テミス）を導いて九坑（ゼウスの居所と解す）に之かん。靈衣被々たり、玉佩陸離たり。一陰一陽。衆、余の爲す所を知る無し。

（三）疏麻の瑤華を折り、以て離居に遺さん。老冉々として既に極まれり。寢近づかざれば愈々疎まれん。

（四）龍の轔々たるに乘り、高馳して天に冲れり　桂枝を結んで延竚し、羌愈々思うて人を愁へしむ。人を愁しむるも奈何せん。願はくば今の虧るなきが若くならん。固より人生當ることあり、孰れか離合を爲す可けんや。』

「少司命」の賦に『民の正たる』の語と『長劍』との語あるに考へると、是れは明かにテミス正義の女神が、劍を帶びて居ることを謂ふたものと解せられ ――

『(一)秋蘭糜蕪として堂下に羅生し、綠葉素枝芳菲々として予を襲へり。夫れ人自ら美子あめ。蓀何すれぞ愁苦するや。

(二)秋蘭青々として綠葉紫莖あり、堂に美人滿ち、忽ち獨り余と目成せり。入るに言はず出づるに辭せず、回風に乘じて雲旗を載つ。

(三)悲しみは生別より悲しきはなく、樂しみは新相知より樂しきはなし。荷衣蕙帶、儵として來り、忽として逝く。夕に帝郊に宿し、君誰をか雲の際に須つや。

(四)女と咸池に沐し、女の髮を陽の阿に晞さん。孅人を望めども徠らず。風に臨んで悅(失望)として浩歌す。

(五)九天に登つて彗星を撫で、長劍を慰めて幼艾を擁す。蓀、獨り宜なるかな民の正たることや。』

イリス女神――イリスとは虹霓を意味し、花では燕子花である。此女神は海の神ポントスの娘で、ゼウスとヘーラ女神との使の神として、天と地との間に往來するには美しい虹霓は最も相應しい者である。

イリス女神

其忽ちに現はれ又忽ちに消える有樣は、天津風雲の通路吹き閉ぢよ、乙女の姿暫し留めんに比すべきである。(日本では神武天皇の御母玉依姫は卽ちイリス女神である。)玉依とは語源 Thauma Iris 卽ち『驚くべき美しい虹霓』である。此女神の手に持ち玉ふは使者の神の記號たるケルキヨンなるもので、其手に抱き玉ふはアトラス卽ち鵜萇草萇不合尊に當る神である。此女神は使者の神たる點に於てはヘルメースの神と殆ど同樣の性質であるが、此女神は美しい虹霓で女性に相當し、ヘルメースの神は男性

として風の速力を記號とするの相違がある。

ネメシス女神――ネメシス女神は又「夜」の娘である。此女神は正當な怒と、神々の復讐とを代表し、淨玻璃の眼を以て正義と監視とを司り、別名をアドラステヤと謂ふて居る。蓋しネメシスの「ネメ」なる語は日本語「睨め」に當つて居る。アドラステヤとは「逃れ走ることの出來ぬ」「譬」を意味する名である。

ヘーベ女神――ゼウスとヘーラ女神との間の娘たるヘーベ女神は、若盛りの美しい少女で、オリムピヤで開かれる神々の宴會の時の御酌である。又母ヘーラ女神が戰爭に出で玉ふ時は、ヘーベはヘーラ女神の馬を武裝し、又兄なるアレースの神の入浴の時には其世話をなし、又ゼウスとヘーラ女神との間に夫婦喧嘩のある時は、ヘーベは何時も其調停の役を務めて居た。然しヘーベの重要な務めは御酌をすることで、神々はヘーベの御酌で陶然と醉ひ玉ふのである。日本語で大に醉ふことを「ヘベレケに醉ふ」と言ふが、これは「ヘーベの御酌」を意味する希臘語 Hebe-eryoko と思はれる。ヘーベは最も神々に愛せられ敬せられた者だが、或時宴會の席上で『襲

の雲に月經ちて』粗疎をしたからして其職をやめねばならぬやうになつた。ヘーラクレースが地上の勳功を完うして天に上げられた時に、此美しいヘーベは彼れの妻となつた。（此女神は月氏である。）

ガニメーデース

ガニメーデース――ヘーベが御酌の職を止めて後、之れに代つた者はガニメーデースとゾふ美少年である。ガニメーデースはツロイ王ソロスの子で地上に於ける人間の中の最も美麗な少年であつたが、ゼウスの神は之れを愛でゝ、强い風を吹かせて、地から天へ運び去つたと云ひ、又ゼウス自身が大鷲に化つて此美少年を天に運び去つて自分の御酌にしたとも謂ふてある。

此ガニメーデースが大鷲或は鷹に取られて行つた神話は著者の鄕里伊豫宇和島の童謠にも『けゞ花（げんげ花）』の歌として三十行の長い歌で今に謠はれて居る。其歌

の初めの部分は ——

「げゞ花〳〵、何故泣きやる、何故泣きやる。親が無いか、子が無いが、子が無いか。親も御座る、子も御座る。〳〵。おいとし殿御や。鷹匠町、〳〵。鷹に取られて、今日七日、〳〵。七日と思へば、十五日、〳〵。十五の細道、出て聽けば、〳〵。鼓や太鼓でお囃しやる、〳〵。」（後略）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

で、善く〳〵研究して見ると印度河上流、昔の乾陀羅方面から東南恒河流域一帶、昔の笈多王國全部の地理を歌にしたもので、笈多は Gupta 卽ち鷹の事、『鷹匠町、鷹に取られて』とは此地の事を云ふたものである。又げんげ花（蓮華草と云ふは誤りである）とは Ge-ange「地より上げる」を意味し、美少年ガニメーデースの語源も

Ge-any-medes で同じく「地より上げる美」を意味し、此美少年の名はげんげ花と同じである。又乾陀羅國の語源も（Ge-ni-dara で「地より上げる」を意味し、此處に地理上の着眼が出來る。且つ印度神話にガンダルバ（乾陀羅）なる者があつて、インドラがガンダルバに打勝つて彼れを取つて天に上げ、彼れは天に在つてソーマの酒を掌る者としたとあり、希臘神話でも彼れは『神の如きガニメーデース、人間中の最も美しい者』と云ひ、印度文學でも『神の如きガンダルバ』と謂ふてあるなど兩人全く同じ神話上の人物で、希臘神話ではガニメーデース、印度文學ではガンダルバ、宇和島童謠では「げんげ花」となつて居ることが察せられる。

ミューズと日本の「宮中八神」及び地理——吾等は神話の此部分に、最も重要な比較事件がある。其れはミューズと、日本の宮中八神なるもので、是れが全部ミューズ女神たることである。前にも一言した如く「ミューズ」とは Muse 卽ち產靈で、宮中八神なるものが、盡く「むすび」の神々であることが、日本及び世界古代研究に取つて、興味ある且つ有益な問題である。日本の八神と希臘神話の九のミューズ

とを比較して表にすると左の通りである。又其地理も表の中に加へて記す。

希臘ミューズ（むすび）	日本宮中八神	ミューズ（むすびの神）地理
（一）クリオー	（一）高御魂（一名カ ソロギ）	○古のメヂヤ西部サガルチ
（二）カンリオペ	（二）神魂（一名カ ソロミ）	○小亞細亞西部古のゴマル
（三）エラトー	（三）生魂	○バルカン半島トラケー
（四）テルプシコレー	（四）足魂（意富斗能智神 大斗乃辨神）	○バルカン北部、ダニューブ流域
（五）エウテルペ	（五）玉留魂	
（六）ウラニヤ	（六）大宮乃賣（面足神 惶根神）	○バルカン、古のツリバリ
（七）メルポメネ		○黑海北部古のスキタイ、及び高加索
（八）ポリヒムニヤ	（七）大御膳神	
（九）タリヤ	（八）事代主神	○バルカン西部ダルマチヤ
（一〇）アポローン（ムサゲテース）		○波斯西部

クリオーは美言、顯章を意味して日本の高御魂の別名神漏伎即ち希臘語 Kalli-logi で美言、顯章である、カンリオペは日本の神魂、神漏美で Kalliope 即ち美音美聲であ

る。エラトーは若き愛と生命で、即ち生魂である。テルプシコレー（Terpsi-khore）とエウテルペ（Eu-Terpe）とは Terpo を語幹として兩者に共通し滿足を意味し、即ち足魂である。ウラニヤは其意譯は玉留魂である。メルポメネは嚴肅の容貌を意味し、面を持つて居るが、日本の開闢七代中の面足神に當り、ポリヒムニヤは讃美に富むを意味し、日本の阿夜根惶神に當り、是等二つの神も、地理上の關係で、日本では一つとして大宮乃賣としてある。タリヤは開花豐富、農作の神で、大御膳神、食物の神に當つて居る。ミューズの指導者たるアポローンは、神性及び地理等の比較研究上事代主神に當り、アポローンは「ムーサギ」の神と稱し、事代主神は「御尾前」の神と云ふてあつて發音上の少變化と知れる。

されば希臘のミューズは全然日本の宮中八神に當つて居ることは、聊かでも比較言語學の解る人には疑ふ可き餘地がない。日本の皇室に此人生文化、平和の源泉たるミューズの神々が宮中八神として祭つてあるが如きは、實に世界に冠絶した國風と謂ふべきではないか。尙ほ又比較研究を進めて精細にする時は、是等ミューズは

開闢の神々であり、日本建國の大祖先であることが知れる。日本の國體は實に此點から說き始めねばならぬ。

ミューズ地理――ミューズは世界文化の源泉の神々である以上は、又人類歷史の始源地に其地理的着眼を向けて誤りはない。ミューズの母はムネモスネで、其對譯が高加索の北のサルマチヤである。ミューズは凡て黑海の四周、昔のミシヤ（ミューズの語源）又アシカニヤ（葦かび）の地であつて、第（一）クリオーはメヂヤ西部の昔のサガルチ又高見魂の神の地である。（二）カンリオペは小亞細亞別名ゴメルである。（三）エラトーはバルカン半島のトラケーで若き生を意味する地である。（四）テルプシコレーと（五）エウテルペはダニューブ河流域の地で、日本の意富斗能地神、大斗乃辨神（Auto-noti, Auto-noe）の地である。（六）ウラニヤは其西部のツリバリ、又昔のスコルヂスキの地で、「玉留」を意味し、又天文を意味するのである。（七）メルポメネは嚴肅な容貌、卽ち黑海の北のクリミヤ別名タウリカの地名が其別譯で、日本の面足神に當つて居る。（八）ポリヒムニヤは、高加索の別譯で、日本

語「あなかしこ」「阿夜、惶根神」の地、卽ち日本の大宮乃賣女神の地である。此女神の事及び其大宮の事は北人神話「エッダ」の中のヘラ女神――嚴肅の容貌の女神の比較研究から知ることが出來る。（九）タリヤはバルカン半島西北部アドリヤ海に沿うて居るダルマチヤで、タリヤの名の別の書き方である。アポローンの地は後代の神話は非常に廣大であるが、其始めは波斯西部及びアッシリヤ、昔のクタの地、事代卽ち琴代の地であつたことが察せられる。概言すれば、ミューズの母ムネモスネの地は古代の廣い意味のサルマチヤで、ミューズの地は黑海の四周、廣い意味のミシヤ（是れミューズの語源）及びアスカニヤ（又アシカニヤ卽ち「葦かび」）の地である。又日本開闢記は此地理で讀まねばならぬことを一言して置く。

テミス、ヨウルノメ、運命女神の地理――神話地理は種々の事情で移動する。ゼウスの地理も多くある。テミス女神はチタン族時代には阿弗利加西北部のスミヂヤであつたが、ゼウスの地理に移動があり、此女神が迎へられてゼウスの許に行つたと云ふは、又女神の地理に變動があるよを示して居る。ホーライ女神の母としての

本原の地理は阿弗利加東部、ナイル河の上流ヌビヤである。ヌビヤは前に云ふたヌミ・ヂヤと同語の小變形に過ぎぬ。ヌビヤ、ヌミヂヤの語源は Nomos 法律、正義を意味し、テミスの別譯と見るべきである。其娘ホーライ女神の地は其西部アビシニヤとカルツームとの土地で、其地の青ナイル河の源を成す三つの河にホーライ三女神の名が付いて居る。其三の河の南の古代名稱アスタ・プス川はタリヤ（開花）女神に、其北のアスタ・ソバ川はオーコ（成長）女神に、又其北のアスタ・ボラはカルボ（實のり）女神の名に對譯される。

ヨウルノメ女神、優美女神の地も亦同じ土地である。思ふにヨウルノメ女神は實はテミス女神と同じく、ホーライ三女神は、優美、三女神と同じものを別々に傳へたものゝやうである。故に、テミス女神の名の別譯はヌビヤ、又ヌミヂヤ、語源はNome（Nomos）であり、ヨウル・ノメ女神の名も下半語ノメ（Nome）で、兩者同じことが察せられる。娘たる優美三女神の名も兩者全く同意義の別譯で、ホーライ女神のタロー（Thallo）は優美女神のタリヤ（Thallia）と全然同じく、次のオーコは優

美女神のアグライヤ卽ち成長、莊大、勝利を意味して、之れも同じく、第三のカルボは優美女神のヨウフロスネ卽ち成熟、歡樂を意味して兩者同じである。且つ其土地はカルツーム（Kharttum）で、「優美」の希臘語を Klaritis と謂ひ、同語の語尾の小變化と見て誤りはないと信ずる。且つ優美の語を英語等で Grace と謂ふが、之れは「希臘」Greece と同語で、阿弗利加ナイル河の西部一帶を太古は Graike 卽ち希臘と云ふたことは、古代地圖の明瞭に示す所である。さらば優美女神の地は是れで、テミス女神と其三女、ヨウルノメ女神と其三女との地は同一であると斷定すべきである。

運命三女神の地も亦其附近である。運命女神は『夜』の娘と云ふてあるが「夜」なる語は希臘語 Eniyx で、前のヨウル・ノメの上前語ヨウル（ヨル）と同じである所を見ると、又此女神も前者と同じものと思はれる。又 Eniy なる語は夜でもあるが絲を「撚る」ことでもある。此女神の娘たる三女神の名は前の一對の三女神の地とは少し異うて、全くナイル河の本系統に屬して居る。研究の着眼は絲を合はすこと、

撚ること、剪み裁ることである。三女神中最も若いクロートーは光明の絲と暗黑の絲とを績いで交ぜて居る所から考へて、ナイル河のカルツームの上流地 Zhilak で績ぐことを意味するからである。そしてナイル河の源流は白ナイルと青ナイルとの二つであつて、白は光明の絲を示し、青なる語には暗黑の意味があるから之れが所謂暗黑の絲である。且つナイル河の名稱の意味は、未だ世界の學者が明瞭にした者は一人も無いが、此神話に據つて始めて明瞭にすることが出來る。ナイルとは Neilos で其れは希臘語 Neilo 卽ち「絲撚り」河を意味するものである。青ナイルと白ナイルとはカルツームに會流して、其れから北に流れる地方を昔は Meroe と云ふた。メロエとは希臘の「運命」を意味する Moirae の變化たることは語學を扱ふ者には一見して知れることで、之れが運命の神第二女ラケシス卽ち白と青との絲に撚をかけて居る地である。最も年長のアトロポスは其絲の寸尺を計つて剪み裁つて居る。卽ちメロエから北へ行くと Berber の地がある、英語の Barber と同語

で剪み裁ることを意味する地名である。且つ此地の都を昔は Premis Magna と云ふたが、これはアトロポスの別譯である。此うして運命女神の地は明瞭に發見された。又今まで知れなかつたナイル河の名の意味は「絲撚り河」であることも始めて余に由つて發見されたのである。(日本語で絹布を「ぬめ」と云ふはヨウル・ノメ及びヌビヤの語源 Nome であることも考へられる)

且つ是等ナイル河上流アビシニヤ附近は、世界太古に大文明の有つた所で、今でも其地方から太古の大建築などが地の底深い所から發掘されるを見ても、神話地理を此地方に求めるも當然の事である。日本太古の最も隆盛な時代——景行、神功などの時代には此地方は重要な日本歴史の舞臺であつたことを一言して置くに止める。(「日本書紀」及び近松「日本武尊東鑑」を見よ)

イリス女神の地理——は埃及のチムシヤ湖で、其父ポントスとは埃及デルタの事である。此女神は日本の玉依姫と同じで、父ポントスは海神の事である。

以上の神々はミューズも、テミスも、ホーライも、優美女神も、運命女神も、何

れも皆、民族及び神話移動と共に後代印度方面に移ることを心得て居らねばならぬ。殊にテミス女神は後代の神話地は印度恆河々口の西の地に出來、ホーライ女神も亦、其地に出來、尙ほ〳〵東の方に進んで爪哇、スマトラもホーライ（蓬萊）の地となるのである。優美女神も印度に其地が出來、運命女神の地も印度に出來る。恆河から西の方、海岸一帶が其地のやうである。

ヘーベとガニメーデース地理――ヘーベは神々の御酌をする女で、御酌と月經の土地は印度河上流昔のオークシアルテス、酒杯捧持を意味する土地である。月經は月關係で、昔の月氏國のことである。ガニメーデースは、前に言ふた通りガンダルバ又ケンダラ國の事である。

ネメシス女神の地理――は印度河上流で、昔のアドラスタイの地が卽ち女神の別名アドラステヤの名を負うたものである。此地には又睨めることの神話もあつて日本の文學に傳はつて居る。

第五章　アテイナ女神（ミネルヴ）

アテイナ女神――日本では天照大御神であり希臘ではアテイナである大女神は、父、ゼウスの神に次いで神々の中の最も尊い神である。

日本は天照大御神が創建し給ふたと同じくアテイナイの國はアテーナ女神の創建し玉ふたもので、希臘――特にアテイナイの國と此女神とは實に離る可からざる關係があることは、日本と天照大御神との關係と同一である。

前きに宇宙は天上天下をゼウスに、海をポセイドーンに、黃泉國をハイデースに、三兄弟の間に三分せられて、ゼウスは其最も高い位にある神だが、アテイナ女神は父、ゼウスの位を繼ぎ玉ふてゼウスと同體であり、其分身であり、又其代理である。

女神の誕生――アテイナの神は大神ゼウスの娘であるが、最も不思議な生れ方をし玉ふた神である。母の名をメーチスと謂ひ明智を意味するが、アテーナ女神を姙

まれた時、ゼウスに警告して、メーチスに生れる子はゼウスに優つて有力であると言ふた者が有つた爲めに、ゼウスの神は恐れてメーチスの神を呑み盡し玉ふた。然しメーチス女神の胎に姙まれて居た子は、今やゼウスの額に姙まれる事となつたが、御産の時になつてゼウスは前額の陣痛が激しく、其苦悶言ふに言へぬ程であつたから、鍛冶の神ヘーフアイストスは、鐵鎚を揮つてゼウスの前額を打ち破つたら、アテイナの女神は忽ち躍り出て玉ふた。其時アテイナ女神の姿は身には黄金の甲冑を着、吶喊の聲を初聲とし、長槍を揮ひ、父なる神の大前に立ち玉ふた。之れが爲めにオリムポスの神山は震動し、地は鳴り轟き、海は蕩搖いて波濤はオリムポスの山にまでも打上げたと謂ふてある。此女神は實にゼウスの智慧の神化したもので、又此女神は軍の神であることを示すものである。女神は父ゼウスの神性を繼いで、又暴風、霹靂電擊の神である。其雷を含む雲の記號として、閃電を以て緣取つた山羊の皮を以て肩衣とし、妖怪ゴルゴンなる者の首を其胸部の裝飾とし、以て破るとの出來ず又敵すとの出來ぬ武器とし、又楯としてある。此肩衣をアイギスと謂ひ又ア

マルテヤと謂ふ。元來此アイギスは父ゼウスの物であつたが、アテイナ女神は父の位を相續し玉ふた所から相續權の記號として之れを着け玉ふのである。

水神ポセイドーンとの競爭

——明智の女神に姙まれ又再びゼウスの前額に姙まれて生れ玉ふたアテイナが、智慧の女神であるとは明かな事で、智慧と富との競爭神話として、アテイナ女神とポセイドーンとの競爭なるものがある。

希臘の太古の人民は尙ほ甚だ少く、今のアテイナイ市の如きも僅かに聖丘アクロポリスの中腹に僅かばかりの人間が穴居したり、或は粗末な小屋を作つて住んで居たに過ぎなんだ。然るにこゝにケクロップスなる蛇人が來て、其智慧を以て人々に耕す事や衣服や食物の事を敎へ、人間の道德や神々の事を敎へ、遂に人々に敬はれて此地の王となつた。或時二個の貴い人が來た。一人は貴女で一人は男子であるが、各々名乘つて曰ふに『我は水神ポセイドーンである』『我は智慧の女神アテイナである』と。ポセイドーンの言はれるに『此土地には我れの名を名付け、我を守護の神として祭れ。船や金銀や其他の富を與へる』と。アテイナ女神も亦曰ひ給ふに『人々よ我言

葉を聞け。我は萬事萬物中の最も貴重な智慧なるものを授げる』と。そこで人々は何れに從ふたが善いかの判斷に迷ふて、遂に是等の二人の神が人間に授ける所の賜物で其優劣を判斷し、其優つた方を以て此市の守護神と爲ることに決定した。ポセイドーンは携へて居る三叉の戟で丘山の岩を擊ち玉ふたら一匹の白馬が躍り出た。然し人々は未だ馬の使用法を知らなんだ故に何等の價値をも認めなかつた。アテイナ女神は携へ玉ふ槍を以て地を突き玉ふたら、綠色濃く枝葉茂れる橄欖の樹が生え出た。そこで人々は判定してアテイナ女神の恩賜を以て貴重なものとし、此神を守護の神と仰ぎ、其地をアテイナイと名付け、其地の山をアクロポリスと謂ふて、女神を祭り、其地の人々は智慧に於て世界第一の國民になつた。アテイナ女神は競爭に於て水神に勝ち、馬を馴らし轡や馬具を考案して人間に益立て、又之を戰爭に用ゐることも敎へ玉ふた。此馬を馴らす女神の神性をアテーナ・ヒッピアと名付ける。

智慧、戰爭及び國家守護の神——武裝を以て、ゼウスの前額から生れ玉ふた女神は、處女であつて、智慧、戰爭及び國家守護の神であり、好み玉ふ音樂は又尙武のもの

アテイナ女神

で身から武裝して刀や槍を揮ふて舞ふことを樂しみとし玉ふた。此の神性をパラス・アテイナと謂ひ、又パラダとも謂ふてある。日本で「八劍」とあるは此の「パラス」の對譯である。是れは日本人の好む所の劍舞である。

女神は又『敵を屠り』戰爭には嘗て『疲勞するなく』、又『奪掠鹵獲物を積み集める』神である。其戰爭が始まるに當つては『前進先鋒』の神である。此の神性をアテーナ・プロマッコスと謂ひ又アゲマキ（揚卷）の神とも謂ふ。日本書紀に云ふてある、撞賢木稜威魂・天疎・向津姫命とは此の神性を云ふたものである。此の他に戰鬪の神アレースがあるけれど、アレースは荒神で强暴突進亂暴の神たるに過ぎぬ。

然るにアテイナ女神は智慧を以て事に當る所の大元帥的の神である。「イリアッド」二十一章には、アレースの神がアテーナ女神に敵對して不體裁な全敗を取つた神話がある。チタン神族との戰爭には、女神の當の敵は地震の神エンケラドスなる者で、女神の勝利は暴力に對する神聖な智力の勝利であつた。後代希臘が波斯の大軍を打ち破つたは全く此の女神の神威に藉るものとして居るは眞に理由がある。且つアテイナイ人は、單に軍事のみに止まらず、一切國民の活動たる所の政治も國防も、農工、町村の事も、皆此女神の特殊の保護に依るものとして居る。此の神性をアテーナ・ポリアスと謂ふのである。

平和の技術の神——然し此の通り尙武勇壯な此の女神は、又平和の神であつて、市場附近の神社には此の女神は鍛冶の神ヘーファイストスと共に祭られある。かのツロイ戰爭の時木馬を作ることを希臘人に敎へ、又ヤソン遠征の時アルゴ丸を造らしめ玉ふたも此の女神の感化に由るものである。笛は此の女神の發明し玉ふたもの、橄欖樹の栽培、橄欖油の製造も此の女神の敎へ玉ふたもので、橄欖の樹は此の女神

の記號であり、從つて又智慧の記號となつて居る。女神はアテイナイの土地の兒たるエリクトニウス(聖土)なるものゝ養母となり、農業保護の神と崇められてゐる。ホメーロスは婦女子の仕事を稱してアテイナの仕事と謂ふて居る。醫術も亦此の女神の保護し玉ふもので、其神性をアテイナ・ヒギヤと云ふのである。此の通りに大工も、農夫も、織女も、醫師も皆此の女神を崇拜する。殊に婦女子の職とする所の機織の術は此の女神の最も優れ玉ふとに就いては機織女アラクネとの競爭神話がある。

織女アラクネとの競技——こゝにアラクネなる少女があつた。ルヂヤの者と云ふてある——色は青白いが眼は綠色で髮長く、糸紡績、機織、繡箔等の技術に巧妙で、朝から正午までは日に向つて糸を紡ぎ、午後は日蔭で機を織つて餘念がない。其織る帛は柔かで肌膚に溫暖く又美しい所から、人が皆云ふに、是れは必らず木綿や羊毛や又は絹で織つたものでなく、其經には日の縱の糸を用ゐ、其緯には、黃金の糸を織つたものであらう、其織る帛の美しさよ又其手並の美しさよと。されば林や泉に住む仙女等も此處へ來てアラクネの機織る樣を見る程であつた。其技術の巧

妙なことを見た人は、必ずこれはアテイナ女神の敎へ玉ふたものであらうと評して居つた。然るにアラクネは之れを否んで『妾は決して女神に學んだことは無い、若し其れを疑ふ者があらば、妾は女神と技術を競爭しよう。妾若し負けたなら甘んじて其罪を受けるばかり』と言ふた。アテイナ女神は此言葉を聞いて喜び玉はず、自ら老女の姿となつてアラクネに現はれて、親切に忠告するに、其樣な傲慢なことを云ふものでは無い、若し其技術を競べようとならば、人間同志之れを爲て之と同時に、神に對して謝罪して其宥恕を願へとのとを敎へ玉ふた。然るにアラクネは頑冥不靈で之れを聽かず、『妾は女神を恐れぬ。女神が若し敢て競爭し給ふ氣なら、妾は之に應ずる』と。そこでかの老女の言ふに『女神は來臨ましました』と。今までの變裝を脫ぎすてゝ『我はアテイナ女神である』と名乘り玉ふた。茲に於て並み居る仙女等は平伏し、傍觀して居た人々は、女神に對して敬禮を致した。然るに獨りアラクネばかりは何等敬意を表せなかつたが顏色一時に變つて、見る見る蒼白となりつゝも、尙ほ其運命に突き進まうと決心した。

茲に於て競技の日を三日の後と定め、世界の人を傍觀者とし、雲の內なるゼウスの神を審判者とし、各〻誓を立てゝ、女神若し競技に負けた時は、未來永劫機を織るまい、アラクネ若し負けた時は、一生機にも紡錘にも亦捲棒にも決して手を觸れることは出來ぬと約束をつがふた。

其日は來た。アラクネは桑の樹蔭に機を設けたら蝴蝶はあたりに飛び交ひ、蟋蟀は梭の音につれて鳴き歌ふた。天の神アテイナも亦空中に機を立てゝ織り玉ふたら冷しい風は手もとにそよ吹き、夏の日影は照り映えた。

アラクネの織り成す帛は薄く、柔かく、又其輕いことは、扇がば風に浮ぶかと思はれ、又其强靭いことは之れを以て獅子をも縛ることが出來る程で、其色彩光澤の妙なることは細雨に映りそふ虹の夫れにも比ふべく、其れを見た人々は皆此少女の前きの矜も道理があると感心し、審判官ゼウスの神も亦尤もだと首肯き玉ふた。

アテーナ女神の織り出し玉ふ帛の模樣は、涼しげな泉があつて夏の影により、花里あり、夏の樹立ちあり、千種の花あり、秋の野あり、紫あり、人あり、鳥あり、

奇怪なものあり、城あり、館あり、磨き立てた高樓あり、又樣面白い高い山等があつて(「源氏」乙女の卷の六條の館の形容そのまゝ)、世界の美觀は女神の織り玉ふ帛の中に、殆ど表はし出されたかと思はれる(一書に據れば、アテイナ女神の織り玉ふたのはポセイドンとの競爭や其他の教訓小話の畫であると)。されば是を觀たものは其精巧なのに恍惚として、アラクネの織つた物の如きは、到底比較にならなかつた。茲に於てアラクネも到底自分の技術の女神に及ばぬことを悟つて絶望のあまり、只泣きくづ折れるばかりであつた。アテーナ女神はアラクネの心の中を憫れみ、其傲慢の罪は免れぬとするも、せめては機や紡錘を用ゐないで紡いだり織つたりさして遣らうと、携へ玉ふ槍で輕くアラクネを打ち玉ふたらアラクネは蜘蛛に化り、忽ち叢の中に入つて、樂しげに其巢をあむことゝなつた。世上の蜘蛛は此アラクネの子孫であると言ひ傳へられる。

オビヂウスの神話に據れば此競爭の時アラクネの織り出した帛の模樣は、神々の不品行、卽ちゼウスの神が白鳥に化つてレーダ女神に接近し、黃金の雨に爲つてダナ

エ媛を姙娠せしめたり、或は牛に化つてヨウロッパ姫を誘拐した等のことであつた故に、アテイナ女神は餘りに神に對して不敬なのを怒り、大にアラクネを叱り、其織物を切れ〴〵に裂き破つて、『汝罪深き女子よ、此罪惡の記憶を保存せよ』と叱り玉ひ、此少女を蜘蛛にして永久絲を紡ぐことを爲さしめたと謂ふてある。

アテイナ・ニケ——勝利を神化して。ニケと謂ひ、女神が勝利の神である所からして女神をアテイナ・ニケと謂ひ、勝利の神として尊崇する。ニケの像は美術では羽翼

ケニ・ナイテアア

ある女神として競爭場の空に飛んで居る姿を以て表はしてある。日本神典の『和魂』なるものは此ニケ卽ちニキ、和、饒、ニコ〳〵である。ゼウスの神が右の手に捧げて居る小さい像も亦此ニケの神像である。

女神は凡ての正義、善美の事業の指導者であり、偉大なる事業を行ふ所の英雄の保護者であり、又捷利を與へ玉ふ神である。ペルセウスの胸中に英雄の烈火を燃やし、之を勵まし、之を指導し之を保護してゴルゴンの首取りの大遠征を行はしめ玉ふたは女神である。豪毅不屈のヘーラクレースの保護者になつて、彼が勞役を終へて疲れた時には溫浴を以て疲勞を息め玉ふたは女神である。テーセウスも亦英雄で、此の女神の感化を受けたものである。ヤソンを勵ましてアルゴ丸の大遠征の船を造らしめ玉ふたのも女神である。ユリセースが難船した時に現はれ玉ふたのも女神である。女神は眞に英雄の神、勝利の神である。

吾天照大御神――希臘神話の大神ゼウスは日本の伊邪那伎尊たる以上は、ゼウスの娘で、天位の相續者たるアテーナ女神は、素より吾天照大御神に當るとは無論

である。今若し女神の誕生の有樣や、神性や事業等を見て、之を天照大御神に比較する時は、吾等は其全く同一の神を東西に別々に傳へたものであることを知るのである。

アテイナ女神はゼウスの前額から生れ玉ふたと謂ひ、天照大御神は伊邪那伎尊の左の目から生れ玉ふたと謂ひ、何れも頭から生れたとの事は一つである。

アテイナ女神が武裝を以て生れ玉ひ其時山も海も震動したとのことと海神ポセイドーンとアテイナ女神との競爭神話とは、日本に於ては須佐之男尊が天に上り玉ふ時山も海も動搖したとの事と同じく、之に對する天照大御神の武裝其他は、全くアテイナの夫れと同じである。

アテイナ女神の肩衣たる不破不敵の「アイギス」なるものは天照大御神に在つては父伊邪伎神から讓り受玉ふた御頸珠「御倉板擧の神」なるもので倉板擧とは希臘語 Kratein「强力不敵」「主權」「統治」を意味し全くアイギスと同じである。

アテイナが農業の神として尊崇せられ玉ふ如く天照大御神も亦農業に關係があつ

アテイナ・ニケ

て、田地及び治水の記事は日本書紀が數々載せて居る。アテイナ女神が機織に長じ玉ふ如く、天照大御神にも神機があり、又機殿もある。

アテイナ女神は馬を馴らし玉ふたが天照大御神にも亦天の斑駒の記事があり、其御孫たる彦火能邇々藝命の御名は希臘語「厩戸生れ」を意味する Hippono-mi-gono の訛つたものであり、又其次なる彦火々出見命は「馬を馴らす」を意味する Hippou-dami の訛つたもので、明かに馬馴らしを意味するのである。

アマゾンとの關係——希臘神話ではアマゾン女國とアテイナ女神との關係は明瞭でないが、女神が女の身を以て武裝して國家を守護すると云ふ點に於ては、如何にしてもアテイナ女神とアマゾン女國との關係がないとは思はれぬ。ホメーロスの詩に據る時は、アマゾン女軍とアイチオピヤとは關係があつて小亞細亞のアルメニヤの別名はアイチオピヤであり、「畫目」を意味し、アテイナと同じ神たる吾天照大御神の大日靈女命と同じ名であるを見ても、アマゾンとアテーナとの關係あることが察せられ、寧ろアテイナ女神はアマゾンの大元帥と謂ふて善いやうである。

且つアテイナは護國の女神であり、天照大御神は天國を守護し玉ふた。「天」を日本語「アマ」(Ama) と謂ひ、「守護」の希臘語日本語を「ゾン」Zone, Zonou (ゾノフ、園生、守護、城) と謂ひ、「アマゾン」とは天國守護を意味し、其女軍は天照アテイナ女神の女軍であるとを知るのである。(日本語「山城」はアマゾンである。)

「アテイナ」の意義——アテイナ女神は大神ゼウスの天位を相續し玉ふた神である。然らば「大女神」と謂ふ可きで、アテイナとは A-theaina の變化と思はれる。其Aは敬語「御」に當るのである。吾天照大御神は一名を大日靈女と謂ふが、其れは希臘語の Aithi-opia に當る名稱で、簡單に謂はゞ「大日」である。(日本の渡邊なる名稱も、和唐内なる名稱も此のアテイナイの訛である。故に和唐内は天照大御神卽ちアテイナイ女神の尊奉者としてある。)

アテイナ女神は天空晴明の神である。故に又心意の濶達、智識明晰の神である。其れ故に此の女神は空の晴た赴きを記號とする。明治天皇御製の

『あさみどり澄わたりたる大空の

廣きを己が心ともがな』

の御歌は眞によく天照大御神の形容に應用することが出來る。

然し天に在つても心意に在つても單に晴れて明かなばかりではなく、時には紫電閃き黑雲を破る霹靂の大喝もある、雷電の射擊もある。之れ亦アテイナ女神の神性で、女神は平和の神であると同時に武の神である。美の神であると同時に威烈の神である。

羅馬のミネルバ女神——羅馬ではアテイナ女神をミネルヴと謂ひ、ユピテルと、ユノ女神と、共に三大神の一つである。ミネルヴとは希臘語源「心の眞柱」を意味する Mne-erma の訛つたもので、「ミネ」とは高い事を表はしては、峰・棟、心では胸を意味し、動物では「巳」即ち蛇、月では「みな月」六月の炎天で、其極を夏至と云ひ、カシ・オビヤのカシ(Casi)は其れである。

美術上のアテイナ——アテイナ女神は普通に武裝した美しい威儀嚴然たる處女の姿で表はし、楯を携へ槍を杖つかせてある。頭には兜を被り、胸から肩には電を

形どつて、緣を取つた肩衣を着け、蛇の蟠つた玉を頸飾りにしてある。バルテノン即ち「處女神殿」にある像は右手に勝利の表號ニケの小さい像を捧げた姿を以てしてある。女神には又梟が神聖である。

アテイナ神話の地理——アテイナ女神が武裝して生れ玉ふたとの地と、海神ポセイドーンと國を爭ふたとの地は、日本古典の高天原即ち小亞細亞アルメニヤの事で、其時海が蕩搖いて波濤がオリムポスの山に打上げたとの海蕩搖くの語はヨウフラテスの別名 Bratlos (Bratto) の名になつて居る。チグリス、ヨウフラテースの河口にも女神の地がある。今バルキスタンの海岸も、昔はアイチオピヤと云ふて女神の名である。亞拉比亞南端の角のアデンもアテイナ天照大御神の名を負うたものである。機織女アラクネの地は緬甸西南部のアラカン即ち『さゝがにの蜘蛛のふるまひ』の地である。恆河口の西にアテイナ女神の地がある。阿弗利加の南部一帶をアイチオピヤ即ち「大日」と云ひアテイナの名を負ふて居る。又東の極の南太平洋のニューギニヤ島にも此の女神が祭られてある。

第六章　日光の神アポローン

アポローン――アポローンは大神ゼウスとレートー姫との間の子で、妹アルテミスと雙兒である。多方面の神性があることは希臘神話中でアポローンに若く神はない。アポローンは天の神である。日光の神である。水の神である。弓箭の神である。琴の神である。詩歌の神である。言葉の神である。ミューズ指導の神である。預言の神である。治療の神である。智慧の神である。正義の神である。立法の神である。インスピレーションの神である。美麗勇壯なる青年の神である。植民の神である。都市創建の神である。平和の神である。武の神である。又破壞の神である。此神に神聖なる動物は山犬、鹿、野鼠、山羊、海豚、及び白鳥等である。妹アルテミスも亦アポローンと殆ど同じやうの神性の女神であつて、唯男性と女性との相違があるばかりである。アポローンに屬する神性は此の通りに多方面である所から、其神

話も亦從つて多い譯である。

レートー姫のさすらひ――神々の住み玉ふ山の上にレートと云ふ美しい少女があつた。ゼウスの大神は甚だ此少女を寵愛し玉ふを見て、妻なるヘーラ女神の嫉妬は烈火のやうで、忽ち此少女を山上から逐下して、天地間一切の萬物に命じて此少女を援けることを禁じ玉ふた。さればレートー姫は此處彼處にさすらふたが、何處の地も暫くも留まつて居ることを許さず、石も地も『行け々々』(之れが「レートー」の意味)と聲を立てレートー姫を追ひ遣つた。レートー姫はさまよひめぐつてリキヤに來た。此時その胎にはアポローンとアルテミスとを妊娠して居たこゝゝて疲勞が甚く且つ炎暑の爲めに渴を覺えて、又如何にもすることが出來ぬやうになつた。時に不圖小山の上から谷間を見下したら清水を湛へる池があつて、其地の人々が柳を取り集め居つた故、レートーは堤に膝ついて人々に一掬ひの水を飲まして呉れよと願ふた。然るに其等の惡漢共は水を呉れなかつたから、レートー姫は彼等に向つて云ふに『水は何人でも飲んで善いものであるに、汝等は何故に之を拒むのである

か。我れは今身體は疲れては居るけれども、水を浴ると云ふでもなく、只我が渴きを止めさへすれば善いのである。此一掬ひの水は、我に取つては天上の甘露と思ふて汝等に御禮を申す』と。然るに惡漢等は尙ほ承知せないで、却つて惡口を言ひ無禮を加へ、或は亂暴を行はうとし、加之彼等は池の中に跳び込んで其水をかき濁して呑むことの出來ぬやうにした。そこでレートー媛は大に怒つて兩手を上げて天に祈つて詛ふて言ふに『彼等は此池を去ることなく、一生此池の中に居るやうになれ』と。其れからして是等の惡漢等は蛙に化つて池の中に住まひ、水の中にもぐり、時には浮んで頭を水の面に出し、又泳ぎ廻り、又再び水の中にもぐり込み、其聲は濁り、其咽喉は脹れ、其口は大きく、其頸は短くなつて胴に續き、其脊は綠色となり、其腹は不體裁に脹れ一生汚い濁つた沼や古池に水の音立てゝとび込み、匍匐上るものとなつた。

アポローンの生誕——レートー媛は一身を置くに所なく、諸方にさすらふて遂に海邊に出て手を擧げて海の神に泣いて訴へた。海の神ポセイドーンは憐哀の心を起して海豚を遣はして、憐を知らぬ陸地からレートー媛を其脊に乘せてデーロス島に迎へ取り玉ふたから、レートー媛は始て安みの場所を得たのである。此小島は元浮島で動搖いて居たから、ポセイドーンは海の底から大理石の柱を立てゝ、鐵の鎖を以て固く此島を繫ぎ留め玉ふた。

アポローン

レートー媛は此島で安らかに雙兒を生み、兄をアポローンと謂ひ妹をアルテミスと名付けた。出産の事が天に聞えたから神々は皆喜び王ひ、デーロス島には木々に花咲き、蒼い海は日光に映つて黃金の色の波を漂はし、

白鳥は島の上に、島の周圍に七回飛び廻り、歡喜の情は天地に充ち、さすがに嫉妬の情に燃えたヘーラ女神も、今はレートー媛に對する情を和げ、地上の凡ての物をしてレートー媛を祝福せしめ玉ふた。

二兒は美しく成長し、アポローンは丈高く、力強く、又美麗で日光のやうである、其行く所は何處でも歡喜を與へた。ゼウスの大神はアポローンに白鳥と黃金の車と琴と白銀の弓箭とを賜ふたらアポローンは之を愛し、歌を善くし、弓を善くし——弓矢の神、琴の神、詩歌の神となつた。妹のアルテミスも亦丈高く、健康美麗で、アポローンと同樣な性質を享け、森や林に入つて惡い獸を獵り、善良な動物を保護し最も鹿を愛した。

世界の中央パルナッソス山——或時大神ゼウスに向つて、世界の中心は何處であるかを問ふたものがある。ゼウスは其等の質問者の二人に命じて、二羽の鷲を携へて、一人は極東の太陽が波から上る所に行かせ、他の一人は極西の日が入つて暗黑

となり、一物も認めることが出來ぬ所に行かせ、ゼウスの相圖に由つて同時に之れを放さした。

鷲は矢よりも速い翼りを以て、東から放したものは西に飛び、西から放したものは東に飛び、遂に空中の一點で衝突して或高い山の頂に墜ちた。ゼウスは此地點を世界の中央と宣告し、是から此山をパルナッソスと名付けたとのことである。是れは前に述べたデウカリオーンの船の擱坐したと云ふ山である。アポローンは此パルナッソスの山を請ひ受けて此地に宮を造つた。

大蛇プトン退治とデルフォイの神託——始めアポローンは此山に宮を造らうとして其基礎を置くべき所を巡視したけれども、さるとり荊が生え茂り、且つ其麓に近い一帶の地に巖が二つに裂かれたかと思はれる崖の谷があり、其洞窟にプトンと云ふ大蛇が住んで居て、時々預言することがあるけれど又數々人や畜類を害するから、アポローンは之を退治しようとして、かの大蛇が草を倒し岩を碎いて通つた道を跡つけて行つたら、大蛇は炬火のやふな目を光らし、口には血たゝれ、鐵のやふな鱗